

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」 ——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方（3）

夏 剛

「後宮三千・荔枝急送」と「特供・選妃」

『現代漢語詞典』に無い「六宮」は『広辞苑』で「りく-きゅう」「りっ-きゅう」の2項があり、主と為る前者の方は「中国で、皇后のいる六つの宮殿。後宮。太平記三九“一の美人”」である。『日本国語大辞典』で同義の「りく-きゅう」「ろっ-きゅう」を副項目とした「りっ-きゅう」の【名】①は、「(古代中国で、皇后およびその他の夫人の宮が六つあったところから)宮中の奥御殿。後宮(こうきゅう)。また、そこに起居する宮女たち」と詳しい。漢籍典拠「周礼-天宮・内宰“以陰礼-教六宮-, (注)正寝一, 燕寝五”」に次いで、異例の2点目として「白居易-長恨歌“回睽一笑百媚生, 六宮粉黛無顔色-”」が出される。用例3点の初出「太平記(14C後)一・立后事“三千の寵愛一身に在しかば, 六宮(リッキウ)の粉黛は, 顔色無が如く也”」は、「後宮佳麗三千人, 三千寵愛在一身。」(後宮の佳麗三千人, 三千の寵愛一身に在り)と複合している。【粉黛】の「【名】①おしろいとまゆずみ。転じて, 化粧(けしょう)。」②美人」の両義は、其々「新撰万葉(893-913)上」等3点と「太平記(14C後)一・立后事」(同前)等3点の用例、漢籍典拠の「北史-周本紀下・宣帝“禁天下婦人-, 皆不得施粉黛-”」と「白居易-長恨歌“回睽一笑百媚生, 六宮粉黛無顔色-”」が付く。『広辞苑』の「①おしろいとまゆずみ。化粧をすること。②転じて, 化粧をこらした美人」と対照的に、『現代漢語詞典』の「〈書〉㊦①婦女化粧用的白粉和青黒色の顔料。②借指婦女」(〈書〉㊦女性化粧用の白粉と青黒色の顔料。②転じて女性を指す)に、古詩文所縁の用例「不施~」(化粧を施さない)と「六宮~」(六宮の粉黛)が添えてある。一柳哲央(本姓遠山, 相談・助言・指導専門家)著『最強の中国は「清華」が作る——13億人を支配する「清華大学」のエリートの全貌』(ぶんか社, 2003)第4章「清華エリートとつきあうための基礎知識」の第3節の題の通り、中国では人生相談も含めて「すべては“成語”で語られる」傾向が知識人の間で強い。『現代漢語詞典』の到る処に古典由来の熟語・成句の^{オンパレード}大行進が見られるのは、数百・数千年に亘る先人の

経験・教訓の結晶として実用的な効能を持ち、^{たか}高が1世紀余り乃至数年の歴史しか無い主義や「思想」より生命力が旺盛だからである。『井上ひさしの日本語相談』（朝日新聞社、1995）の冒頭に、「ことわざ・格言は古くさいか」という家庭教育関連の問いが出る。曾て「文は人なり」「百聞は一見に如かず」等という諺・格言の類は日常的に使われていたのに、最近はそのようなことを言う先生や親が居なくなったのか、という質問者（東京都渋谷区・会社員）の驚きに対し、回答者の小説家・劇作家（本名内山厦^{ひさし}、1934～2010）は、諺・格言は実人生の為の哲学として有効・有益なものだと断言した。様々な場面で活用し得る諺・格言に感心する例として、「一人の娘さんと出会って恋をしたとたん、絶世の美女でもないのに、ことわざに言う“面々の楊貴妃^{めんのめん ようきひ}”，なんだか凄い美人に見えて来て一緒にになってしまいました」と有る。『広辞苑』の【面々の楊貴妃】は「人はそれぞれ自分の妻を美人だと思ふものであるという意」で、彼女が美人の代名詞として和製熟語を生み恋の推進役と化すのは実に愉快である。

「佳麗」は『現代漢語詞典』で「〈書〉①麗（容貌、風景等）美麗；美好。②囙美貌の女子。」（〈書〉①麗 [容貌・風景等が] 美しい。素晴らしい。②囙美貌の女性）の両義と為り、俱に前の【佳句】（＝「囙詩文中優美的語句。」[囙詩文の中の優美な語句]）に用いられる。『日本国語大辞典』の「【名】㊦（形動）ととのっていて美しいこと。奇麗なこと。また、そのさま。㊧美しい女性。佳人。麗人」は、㊦に「万葉（8C 後）二・九〇・左注“容姿佳麗，見者自感”」等5点の用例と、漢籍典拠「史記－亀策伝“或醜惡而宜_二大官_一，或美好佳麗而為_二衆人患_一”」が有り、㊧の「東海一瀕集（1375 頃）一・金陵懷古“当年佳麗今何在，遠客蒼茫感慨多”」等2点の用例の後に、「白居易－長恨歌“后宮佳麗三千人，三千寵愛在一身”」が引いてある。『広辞苑』の「①美しいこと。きれいなこと。“一を競う”② [白楽天，長恨歌] 美女」も、「佳麗＝美女」の語義の起源が『長恨歌』に在ることを示している。「後宮」は『現代漢語詞典』で「囙①君主時代皇宮或王宮中帝王后妃居住的宮室。②借指妃嬪。」（囙①君主時代の皇宮或いは王宮の中の帝王の後妃が住む殿舎。②転じて妃嬪を指す）と説明とされ、『広辞苑』の「①皇后・妃などが住み，女宮の奉仕する，宮中奥向きの殿舎。平安京内裏では，天皇の住む仁寿殿^{にじゆ}の後方にある承香^{じやうかう}・常寧^{じやうねい}・貞観^{じやうくわん}・弘徽^{こうき}・登花^{とうか}・麗景^{れいけい}・宣耀^{せんぎょう}の七殿と，昭陽^{せうやう}・淑景^{しゆくけい}・飛香^{ひやう}・凝花^{ねいか}・襲芳^{じゆほう}の五舎の総称。掖庭。太平記一二“三十六の一には三千の淑女^{しゆくふ}妝^{じやう}を飭^{しちゆう}”②転じて，皇后・妃などの称。太平記二二“一を一人此の狗^{いぬ}に下されて”」（第6版では「[前略]の七殿と昭陽 [中略]の五舎の十二舎の総称 [下略]」）は、6世紀前の唐玄宗時代の「後宮佳麗」と同じ3千人の淑女に古来の中国の影響を窺わせる。『日本国語大辞典』の【後宮・后宮】「【名】（天子の住む殿舎の後方にある宮殿の意）」の㊦は、『広辞苑』の①と同じ日本の概念で「三代格－六・弘仁四年（813）一二月九日」等3点の用例が有る。「②皇后以下の後宮に住む婦人。妃，夫人，嬪（ひん）や中宮，女御，更衣，御息所など」は、「史記－平原君伝」に由来し用例6点の初出「令義解（718）雜令・給炭条」は更に早い。「③貴人の

夫人。また、その座所」は典拠の「戦国策－楚策・威王」が②の数十年後に当るが、用例の「鬢経義疏 (611) 歎仏真実功章」は②よりも古い。日本では大正天皇 (名は嘉仁^{よしひと}, 1879～1926, 12年即位) から天皇の側室制度は廃止され、辞書の国内限定の語釈に「明治までの」と書かなくても現存しないことは自明である。中国では大正元年と重なる中華民国の成立に由って皇室自体が解体され、後宮も『現代漢語詞典』の「君主時代」の規定の通り歴史の遺物と為ったが、彭徳懐は1957年に政治局会議で毛沢東の「後宮佳麗, 粉黛三千」を擁す振る舞いに苦言を呈し、領袖の帝王化を防ぐ可く首長に奉仕する中央警衛団文芸工作団の解散を命じた。

42) 中南海の「特殊別動隊」(造語)は歌舞等で将兵を労う中共軍の文工団の使命から乖離して、^{ダンス・パーティー}舞踏会で高官の舞踏・談笑等の御伴も務めた故「喜び組」の変種と見られ勝ちである。北朝鮮「金家王朝」の領袖専属の類似組織の俗称は「喜ばせ組」が正しいと言われるが、現代の独裁体制下の「後宮佳麗」は声色で客を楽しませる民間の「三陪小姐^{ホステス}」と違って、権力者に接する栄光への感激で嬉々として全身全霊を捧げる^{うぶ}初心^{こころ}さが有る。

『広辞苑』の【楊貴妃】は「①唐の玄宗の妃。名は玉環。もと皇子の妃であったのを、玄宗が強引に自らの妃とした。寵愛を一身に受け、頻繁に華清宮に同行した。楊氏一族も顕要の地位を占めたが、安史の乱で、馬嵬^{ばかい}駅の仏堂で殺された。(七五六)→長恨歌。②能。金春禪竹作の鬢物。楊貴妃を失った玄宗の命をうけ、方士が仙界の蓬莱宮に到り、妃から玄宗の愛の誓詞を聞く」(「名の玉環。」と「楊氏一族」の間の部分は、第6版で「才色すぐれ歌舞音楽に通じて、玄宗の寵愛をもっぱらにし、」に作った)、【長恨歌】は「①唐の白居易の作った長編叙事詩。楊家の娘が玄宗皇帝の寵愛を受けて貴妃となり、栄耀栄華を極めるが、戦乱で殺され、悲しんだ玄宗がその魂を探し求めるといふ筋で、全編七言一二〇句から成る。八〇六年の作。源氏物語など、日本の王朝文学に大きな影響を与えた。②山田流箏曲『長恨歌の曲』の略称。山田校校作曲。作詞者未詳。歌詞は1の翻案」である。『日本国語大辞典』の【楊貴妃】■□の「中国唐の玄宗皇帝の妃。玄宗の皇子、寿王瑁(まい)の妃であったが、玄宗にみいだされ女道士になり、ついで貴妃となった。舞や音楽にすぐれ、また、聡明であったので玄宗の寵愛を一身に集めた。後、安祿山の乱の際殺された。白居易の『長恨歌』(ちょうごんか)をはじめ、詩や小説に多く描かれている。(七一九～七五六)」より、同□の「謡曲。三番目物。各流。金春禪竹作といわれる。白居易の『長恨歌』による。馬嵬(ばかい)ヶ原で殺された楊貴妃を忘れかねている玄宗皇帝は、方士に楊貴妃の魂魄のありかを探すよう命じる。方士は天上から黄泉(よみ)の国まで尋ね歩き、常世(とこよ)の国の蓬莱宮に至って太真殿にいることを知る。楊貴妃は形見として玉の釵(かんざし)を与え、方士の求めで七夕の夜玄宗と交わした比翼連理の契りのことばをうち明け、帰ろうとする方士に霓裳羽衣(げいしょううい)の曲を舞ってみせる。方士が釵を携えて還ると、楊貴妃は宮殿の中で悲しみにくれる」、【長恨歌】は「□中国の詩編。七言古詩一二〇行、唐の白居易(楽天)撰。玄宗皇帝が楊貴妃への愛に溺れて政を

怠り、安祿山の乱をひき起こし、貴妃を失った深い悲しみをうたった詩。陳鴻の『長恨歌伝』を付したものがある。抒情にすぐれ、後代や日本文学への影響が大きい。㊦箏曲。山田流。高井薄阿作詩。山田検校作曲。歌詞は、白楽天の同名の長詩の終わりの部分で、玄宗の使者として方士が貴妃の霊に会う物語である。『広辞苑』の「ちょうこん-か【長恨歌】」の「→ちょうこんか」の通りこの「恨」は濁音が慣用で、王昭君の「昭」の中国語音(zhāo)に近い異読「じょう」と違って中国語の hèn との乖離が大きい。『日本国語大辞典』の前の項の【弔魂歌】(=「【名】死者をいたみ、その魂をしずめるための歌。鎮魂歌」、用例は「国民歌謡・弔魂歌 [1940] (町田敬二)と結び付ければ、世間の汚濁や動乱の混沌、遺恨の深重を音声で感じさせる妙味も覚えて来る。【楊貴妃】よりも分量が多い【長恨歌】は内外での影響・再生産力の大きさを物語り、著名人の事績を虚実混在の形で広く長く歴史に留めて行く文芸作品の力はこれほど強い。










『広辞苑』の【佳句】の「よい句。美しく言いあらわした文句」に対して、『日本国語大辞典』の「(名)(詩歌の)よい文句。また、よい俳句。名句」と、中国語よりも狭く詩歌に限定しつつ俳句にまで範囲を広げている。「済北集(1346頃か)一一・詩話」等3点の用例の後の漢籍典拠は、「韓愈-寄崔二十六之詩“佳句喧-衆口-,老官敢瑕疵”」である。「唐宋八大家」の筆頭を為す文学者・思想家(768~824)のこの無名な句より、杜甫の「為人性僻耽佳句、語不驚人死不休。」(人と為り性僻にして佳句に耽り、語人を驚かさずんば死すとも休まず)の方が、中国では「千古佳句」として教養人の間で可く知られている。人を驚かせる意外性も佳い表現の要素に入るという考え方は為政者にも影響を及ぼし、其故「驚人語」(人を驚かす語)や「動聽美言」(感動的な美言)に拘る偏向も有る。七律「江上值水如海勢聊短述」(江上水の海勢の如くなるに値聊か短述) 43) は、韓愈出生の7年前に作られたので古い方の不採録は選者の念頭に無かった事であろうか。『現代漢語詞典』の【佳】の14の子見出し中2番目の【佳話】は、『広辞苑』の「よい話。美談」と違って、「(因)流伝開来、当作談話資料的好事或趣事」(因広く伝わり、話の材料と為る好い事或いは面白い事)の意と為る。『日本国語大辞典』の「(名)よい話。おもしろい話。また、美談」も同じであるが、「随筆・護園雑話(1751-72頃)」等3点の漢籍典拠「晁補之-即事一首、次韻祝朝奉詩“倏然一室内、黄卷開-佳話-”」と比べて、『現代漢語詞典』の用例「伝為~|千秋~」(「佳話と為る」「千秋の佳話」)は、杜甫の様に強い影響や印象を留る中国語の誇張表現の伝統の発揚を感じさせ、【佳人】の「(書)因美人:才子~|絶代~。」も『広辞苑』の語釈「美人」のみと対照を為す。『日本国語大辞典』の「(名)①顔が美しく姿のよい女。美人。②(男女を問わず)すばらしい人。美しい人」は、前者は「淮南子-説林訓“佳人不_レ同_レ体、美人不_レ同_レ面”」に由来し(用例に「本朝文粹 [1060頃]一・柳花為松賦(紀長谷雄)等4点)、後者は「俳諧・猿蓑(1691)六・題芭蕉翁国分山幻住菴記之後」等2点の用例が付く和製語義である。漢の淮南王劉安(前179~前122)が学者を集め

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (3) (夏)

て作った『淮南子』(現存 21 篇)は、老荘の説を中心に周(前 1046～前 256)末以来の儒家・法家・兵家等の思想を交えて、治乱興亡の政事や逸話・瑣談等を書き留める書物で、件の言は「佳人不同体、美人不同面、而皆説於目。」(佳人体を同じくせず、美人面を同じくせざるも、皆目を説ばしむ)と説くが、「佳人不同体」の字面を振って言えば、佳人は美貌と美德を同じ体に宿らせるとは限らないから②の語義は中国では馴染みが薄い。『漢語大詞典』では②「美好の人。指君子賢人」(素晴らしい人。君子・賢人を指す)の意が有るが、「『楚辞・九章・悲回風』等 5 点の典拠が有るこの語義は何時の間に廃れて了った。王昭君は画工の買収を屑とせぬ高潔と国の為に身を捧げる忍従に由って美名を遺したが、同じ絶世の美女でも楊貴妃の存命中の品格面の「千秋佳話」は見付き難い。

『現代漢語詞典』の【佳話】の語釈中の「趣事」は「囿有趣的事」(囿面白い事)の意で、用例の「逸聞～|説起学生時代的一些～, 大家都笑了」(「逸聞・面白い事」「学生時代の幾つかの面白い事を言い出すと、皆が笑った」)の様に、日本語に入っていないこの硬い言葉は中国では時々使われる。楊貴妃に纏わる興味深い事績を「趣」の「走+取」の字形に引っ掛けて挙げれば、中国語で「麗質」(lìzhì)と同音の荔枝(lìzhī)の交代走行特急調達が有名である。『現代漢語詞典』の【荔枝】囿①の説明は「常緑喬木」で始まり、最後に「果肉白色, 多汁, 味道很甜, 是我国的特産。」(果肉は白色で、汁が多く、味がとても甘い。我が国の特産物)と誇らしく述べる。グルメ・リポーターグルメリポーター並みに「美味しい」等を乱発した「新解さん」は非国産物に冷たい所為か、「円錐(つ)状・小粒で花卉の無い花を開く常緑小高木。実は小さい球形で、うろこ状のものにおおわれる。食用。[ムクロジ科]」と味も素っ気も無かったが、『広辞苑』の①の「ムクロジ科の常緑高木。中国南部原産。(中略)果肉は多汁で香気があり美味。ライチー」は味を礼賛している。『日本国語大辞典』の【名】①は「中国南部原産で、中国広東地方および台湾では果樹として栽植される」と産地まで紹介したが、「果肉は黄色で芳香があり、甘味と水分に富む」と賛辞を避けている。用例 4 点の初出「異制庭訓往来(14C 中)」は漢籍典拠「左思-蜀都賦」より 11 世紀も遅いので、楊貴妃物語が流布し唐詩に親しむ日本でもこの単語は逸話や佳作の影響で早く入る事が無かった。杜牧(803～53)は七絶「過華清宮絶句 其一」(華清宮に過る 絶句 其の一)でその史実を、「長安回望繡為堆, 山頂千門次第開。一騎紅塵妃子笑, 無人知是荔枝來。」(長安より回望すれば繡堆を成す, 山頂の千門次第に開く。一騎の紅塵妃子笑う, 人の是荔枝の来るを知る無し)44)と詠んだ。この詩を知らぬ中国の庶民も新鮮な荔枝を好む楊貴妃の贅沢の伝説を聞いているが、日本では早馬駆伝で好物を運ばせた逸話が知られる半面「過華清宮絶句」の知名度が低い。例えば市野澤寅雄(1896～1986, 漢文学者)は『中国詩人選 7 杜牧』(集英社, 67. 96 年『中国名詩鑑賞 6 杜牧』)として小沢書店より再刊)で、所収の七言絶句 37 首に「華清宮」を入れた(「零葉飜紅萬樹霜/玉蓮開藥暖泉香/行雲不下朝元閣/一曲淋鈴淚數行。」「零葉紅を飜す萬樹の霜/玉蓮藥を開き暖泉香し/行雲下らず朝元閣」)

かく いっきょく りんれいなみだすうかう
閣/一曲の淋鈴涙數行))が、同じく玄宗・楊貴妃の愛の巢が題に有る辛辣な諷刺の1首は割愛している。中国の言語・文学・文化・歴史に対する日本の受容は心性・国情に由って相違が多いが、中国では最上級権力者への「特供」(特別供給)は現代にも続いて来たので、公器の私物化で法外な優遇を享受する物語は現実味を以て再生され続けるわけである。

『広辞苑』『日本国語大辞典』の【荔枝】の次の【靈芝】は、前者では「①マンネンタケ(万年茸)の漢名。瑞草とされる。諸国ばなし“聖人の世に生える一といふもの”②靈妙な働きのあるきのこ」と為り、『日本国語大辞典』では語釈の「〔名〕“まんねんたけ(まんねんたけ)”に同じ」,「菅家文草(900頃)二・九日侍宴。各分一字」等5点の用例と「班固-郊祀靈芝歌」の漢籍典拠とから為る。中国語の「荔枝」(lìzhī)の同音・異声調語には「立志」「理智」「礼治」「離職」「梨汁」等有るが、1字目の読み方が違う「靈芝」(língzhī)は『現代漢語詞典』の「 真菌的一種。菌蓋腎臟形。赤褐色或暗紫色。有環紋。并有光澤。可入藥。有滋補作用。我国古代用来象徵祥瑞。」(真菌的一種。菌の傘は腎臟形。赤褐色或いは暗紫色。環状の紋が有り、光沢も有る。薬用に出る。滋養の効用を持つ。我が国では古代に瑞祥の象徴とした)の通り、中国では観念・実用の両面に於いて神聖・靈妙の形象を帯び貴重な物として特別視される。班固(32~92、後漢の歴史学者)の上記の文章の中の「 瑞、 寿命」は、「 吉利」(縁起を担ぐ)・「益寿延年」(健康に有益で寿命を延ばす)という国民的な願望の強さを思わせる。『広辞苑』の【万年茸】は「担子菌類のきのこ。広葉樹の枯木の根元に生える。腎臟形。傘・軸ともに赤褐色・赤紫色または暗紫色を呈し、漆のような光沢があり堅い。古来、乾して靈芝しと称し、薬用とされるほか床飾りとして愛玩する。サイワイタケ。芝草」と説明され(「薬用とされるほか」は第7版の補筆)、『日本国語大辞典』の「(前略)乾燥しても原形を保ち、腐らないところからの名。古くから縁起物として珍重され、表面をみがき床飾りなどに用いる。(下略)」は、「重訂本草綱目啓蒙(1847)二四・菜」が用例であるが、「茸・芝」と同じ草冠かんむり(中国語=「草字頭」)の菓草の性質は無い。『現代漢語詞典』の【童】の21の子見出しの最初に出る【童便】(=「 中医指十二歳以下健康男孩子的尿。可入藥。」 中国医学で12歳以下の健康な男子児童の尿を指し、薬に用いられる])の様に、「 食同源」の考えが強い中国では動物・植物・鉱物とも治療や滋養の使途が追求される。「新解さん」の【万年】(=「[造語]いつも同じ状態であること」)の内の【一一茸茸③】は、「材木などに寄生するキノコ。かさはつやの有る赤(茶)色。柄は黒くてつやが有る。床飾りなどにする。靈芝し①。[サルノコシカケ]と、見出し語の濁音が前出の2辞書と異なる上に縁起物とする伝統には触れていない。「靈芝」の不採録も特別の思いが無いことの現れのように思われるが、「れいし」の5項目中【荔枝】と【令旨】(=「皇后・皇太子・皇族の御言葉」),【令姉】(=「[手紙文で]他人・相手の姉の敬称」),【令嗣】(=「他人・相手のあととりの人の敬称」)の後の【麗姿】は、楊貴妃物語で日本語の同音語「麗姿」(中国語の lìzī は「荔枝・麗質」と少し違う)に繋がる。

その「美しく整った姿」の意の漢語的表現。“富士の一”は、『広辞苑』の「麗しいすがた」より詳細である。『日本国語大辞典』の「〔名〕見た目にうるわしい姿。麗容」に、「Geoffroy・Tory のこと (1955) 〈渡辺一夫〉」の用例と「何承天－木瓜賦」の漢籍典拠が有る。『現代漢語詞典』に無い「麗姿」が「靈芝」を採らぬ『新明解国語辞典』で登場した事は、美味の評価が多い事と合せて編著者の美食・美貌に魅せられた一面を垣間見せる。『孟子・告子章句上』に見える告子（一説に名は不害、生歿年不詳）の「食色、性也」（食色は、性也）、『礼記「礼運」』に見える孔子の「飲食男女、人之大欲存焉」（飲食男女は、人の大欲これに存す）の様に、**食欲・色欲は人間の基礎的・本能的な欲望の重要な部分とされる**。『論語』「子罕」の「子曰：“吾未见好德者如好色者也。”」（子曰く、吾未だ徳を好むこと色を好むが如くする者を見ざる也）は、寵妃との逸楽・愛欲に溺れた唐玄宗の墮落も好例と為る。荔枝の日本語の別名は『広辞苑』の「ライチー 【litchi】」で「〔植〕荔枝いち 1 に同じ」、『日本国語大辞典』の【ライチー】では「〔名〕（ライチ）“れいし（荔枝）①”に同じ」と説明され、用例「赤い国の旅人 (1955) 〈火野葦平〉 四月二日 “露店の果物点には華南の名物である荔枝（ライチ）がたくさん山盛りにされてあった”」の後に、「〔補注〕“荔枝”は中国語広東方言形から」と有る。「麗姿」の用例と同じ『広辞苑』元年に出た描写が示す様に華南の広東が主産地であるが、5千里以外の長安までの鮮度を落さぬ直送は「荔」の字形の様に力業の連続に他ならない。火急の朝廷文書等を送る早馬駅伝は妃の歡心を買う帝の私用で奔走させられたが、新鮮さに拘る后妃の我儘な職権濫用の腐敗行為は毛沢東時代の「**第一夫人**」にも有った。江青は1971年2月に静養先の広州でショートコート小外套を急に着たくなり、呉法憲司令官に命じて空軍の専用機で北京から送らせた。北京に居た同年9月初旬には山東省青島で使っていた寝台ベッドがどうしても要ると言うので、空軍が北京から大型輸送機を出して運んで戻って来た。⁴⁵⁾ 人件費が余り掛らない唐代を遙かに上回る当代の空路輸送の費用は勿論国の負担で、空軍が毛沢東や林彪の側近に掌握された昔の「自家用」化はともかく、首長用の「特供品」を特別機で運ばないと特供制度を廃止するという進歩は聞かない。「習近平新時代」到来の前夜の『現代漢語詞典』新版に【霧霾】が新設され（＝「☉霧和霾的混合物，霧霾会造成空氣混濁，湿度較大，能見度低：本市今日遭遇～侵襲。」☉霧と霾の混合物。霧霾は空氣の混濁や高い湿度，視界を狭くする事が有る。「我が市は今日霧霾に襲われる」」）、霧霾で中央首長も庶民と同じ劣悪な環境を共有するに至ったと揶揄する声が巷に出たが、普及率の低い空気清浄器が要人宅や上級役所に整備してあるので格差は余り変らない。

黄永勝・邱会作は健康維持の為に秘かに若い兵士の新鮮な血液を輸血しており、江青は葉群から聞き付けると早速2人の警備兵から採取した血の注入を受けた。大病を患っていないなら輸血は不適切だと毛沢東から戒められて中止した⁴⁶⁾が、その気になれば新鮮な臓器の移植で延命を図れる究極の「特供」は昔の帝王の比ではない。林彪夫妻が軍内人脉を動員して息子の

結婚相手を探す工作は「選妃（妃選び）」と呼ばれ、軍委「機要員（機密事項^{スツッフ}担当者）」特別募集の名目で白羽の矢が立った張寧（1949～）は、初代大佐の父親を持ち10歳から南京軍区前線歌舞団に在籍した極上の美女で、その「天生麗質」は葉群主導の選抜と当の「副統帥」夫人の嫉妬に因んで、日本語の「抜群」と中国語の「超群出衆」（群を超え衆に抜きん出ると形容できる。『現代漢語詞典』に単独の項が無い「抜群」は『広辞苑』の①で、「多くのものの中で殊にすぐれぬきんでていること。群を抜いていること」と解釈され、出典「太平記一二“縦先々一の忠ありといふとも”」と用例「“一の働き”“人気一”」が有る。『日本国語大辞典』の項は同じ「（古くは“ばっくん”）」の説明を施し、■【名】（形動）①の似た語釈に付く7点の用例中、篇名・表記が異なる「太平記（14C後）一七・山門攻事“たとひ先々抜群（ハクン）の忠ありと云とも”」は4番目に出て、初出の「本朝麗藻（1010か）下・和高礼部再夢唐故白太保之作〈具平親王〉“古今詞客得_レ名多、白氏抜群足_二詠歌_一”」は、『白氏文集』の伝播による当時の白居易の人気抜群の証と為る（当該作品集の影響は『広辞苑』の「[ハクシモンジュウとも]唐の白居易の詩文集。現存七一巻。八二四年に元禎^{げんてん}が編んだ『白氏長慶集』五〇巻に自選の後集二〇巻、続後集五巻を加えたもの。平安時代に渡来、『文集』または『集』と呼ばれ、広く愛読されて当時の文学に影響を与えた」に特筆してある〔第6版では見出し語の読みは「はくしもんじゅう」で、語釈に「ハクシブンシュウとも」と有った〕。漢籍典拠「梁書－劉顛伝“聰明特達、出_レ類拔_レ群”」の中の四字熟語は、『現代漢語詞典』の語釈は「出類拔萃」で、前に在る主項目は「《孟子・公孫丑上》：“出於其類，拔乎其萃。”後來用“出類拔萃”形容超出同類。也說出類拔群、出群拔萃。」（『孟子・公孫丑上』に「出於其類，拔乎其萃」〔其の類より出_レて、其の萃に抜く〕と有る。後に「出類拔萃」で同類から抜きん出ることを形容する。「出類拔群」「出群拔萃」とも言う）である。

「出類」は『日本国語大辞典』では立項されている（＝「【名】そのなかまからぬけ出すこと。同類からぬきんでること。＊任昉－答劉居士詩“高行絶_レ俗，盛徳出_レ類”」）が、四字熟語を構成する事が無く『広辞苑』には消えている。【抜粹・拔萃】の「【名】①（形動）多くの中から、特にぬきんでていること。他よりも、特にすぐれていること。また、そのさま。抜群」に、「本朝文粹（1060頃）三・弁耆儒〈大江季周〉」等3点の用例と、漢籍典拠「後漢書－蔡邕伝“曾不_レ能_二拔_レ萃出_レ群，揚_レ芳飛_レ文”」が有るが、「②（一する）必要な部分だけを抜き書きすること。書物などから、すぐれた部分やだいたいな箇所を抜き出すこと。また、そのもの。抜き書き。抄録」は、「読本・椿説弓張月（1807-11）続・拾遺考証」が用例2点の初出と為る和製語義である。これに当る中国語の「摘要」（『現代漢語詞典』の項＝「①動摘録要点：～発表。②名摘録下来的要点：談話～|社論～。〔①動要点を抜き出して記す。〔摘要して発表する〕②名抜き出して記した要点。〔談話の摘要〕〔社説の摘要〕〕」は、『日本国語大辞典』（語釈＝「【名】重要な部分を抜き出して記すこと。また、記したもの」）の用例2点の初出「読売新聞－明治102（712）

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (3) (夏)

二〇年(1887)一〇月一日)が和製抜いであるが、『漢語大詞典』の「摘録要点」の意の出典「清平歩青《霞外攬屑・時事・言道著》」は、清末の文学者・目録学者(1832~96)の晩年の作品で両言語の同時期の創出を示唆する。『広辞苑』の「要点を抜き出して記すこと。また、その抜書き。“講演の一”」は一定の使用頻度を思わせるが、中国語で専ら「摘要」を使い同じ和製の「抜粋」を用いないのは「抜群」との混同を避ける為か。優れた部分→大事な箇所という「拔萃→抜粋」は中国語の感覚から見れば矮小化の観が有り、鄧小平等と共に広西省百色蜂起(1929.12.11)を指揮した韋拔群(1894~1932)の名の様に、漢語を使う^{チワン}壮族の革命家も含めて「抜群」は「出類拔萃」志向の表現として好まれる。扱て置き、背丈の大差で葉群を抜き劣等感を覚えさせた張寧の「抜群」は皮肉にも、出自・容姿等に関する諸条件の中で身長が所定の1尺65^分に達していたからである。林家「太子」の「選妃」基準は20年後の皇太子徳仁親王(1960~)の妃選りよりも厳格で、林の麾下の「四大金剛」の夫人を始め各地の軍関係者を駆使した点は「軍先党国」らしい。張は軍区歌舞団から「副統帥」の後継ぎに提供した「貢品」の性質を自覚したが、『現代漢語詞典』の「^囿古代臣民或属国献給帝王的物品。」(囿古代の臣民或いは属国が帝王に献上する物品)の時代限定に対して、毛沢東治下の「封建的な社会主義」でも「君主・臣民」の関係が存在していた。『日本国語大辞典』にも【貢品】は有る(=「^名みつぎもの。貢物。*東京新繁昌記[1874-76]〈服部誠一〉四・博覧会“支那帝之献物、朝鮮王之貢品”」)が、『広辞苑』の不採録が示す様に疾うに死語同然である。林家貴公子の欲求に合せる麗姿献上は楊貴妃の嗜好を満たす荔枝急送と対に為るが、荔枝の「鮮美」(新鮮・美味)と「妃探し」の「選美」(美人選抜)に引っ掛けて言えば、その「献美」(美女献上)は中国語で同音(xianmei)の「献媚」に他ならない。

「挽弓・擒賊」の殺伐と「開弓沒有回頭箭」の悲壮

市野澤寅雄は『杜牧』の「解説 一、詩人杜牧」で中学5年の時の開眼を振り返って、後に漢詩界に重名を馳せた香雲渡貫勇(本名寺田勇、1870~195?)が担当する漢文・作文の授業で、同級生の文中に付けられた評語の「阿房宮の賦を学びたるか」に触発されて、何れも未知の『阿房宮賦』及び作者に目を向け始めたと言う。「文字のあるお年寄りにその文を見せたらちょうど同賦のそこを暗記して、^{あやうけう}長橋の波に臥すは^{なみ}未^{くわ}零^{いまだう}せざるに^{なん}何^{りょう}の^{ふくだう}竜^{くう}や、^ゆ複道の空を行くは^は霽^{なん}れざるに^{にじ}何^{ろくわう}の^は虹^{しかいつ}ぞ”の二句を教えられた。同賦が“六王畢りて四海一に蜀山兀として阿房出づ”に始まり、“秦人自ら哀むに暇あらずして後人之を哀み後人之を哀みて之を鑑みざれば^{あほう}亦^い後人をして^{しんじんみづか}後^{あは}後人を^{いとま}哀ましめん”に終わる華麗な七百餘字が、痛い政治批評・社会批評なのを知ったのは大分後だった。私の父なども^{こうなんしゅん}江南^{さんこう}春や山行を私ら子どもの耳に入れてくれたのも記憶にある。杜牧の片言寸語が随分読書人外にも誦誦されていたようだ。古来の学者文人の

中でも邦人の多数の趣味に合うこの人^(ママ)にあったと言いなからうか。」文中の「文字」は『日本国語大辞典』の「■【名】(“もんじ [文字]”の撥音“ん”の無表記から)」の「⑤転じて、文章、文才。また、読み書きや学問、知識、素養などをいう」に当り、用例5点の初出「蔭涼軒日録-文明一八年(1486)六月二四日」は市野澤逝去の500年前に当り、最後の「明治の基督教文学(1907)〈柏井園〉“文学上の生命が夙(はや)くより我が基督教界に活発であった理由の一は初代に於て道に入った人々が大抵文字があり和漢学の素養のあった人々であった事である”」は、明治の識字率向上の成功に繋がった「文字=学識」の考えの効用を示唆する。『広辞苑』の「㊦⑤学問。文章」(用例=「浮世床初“一の方へも入つて見ろ”」)に対して、『現代漢語詞典』の「㊦③文章(多指形式方面):~精通。」(㊦④文章[多く形式面を指す]。「文章がすっきりし読み易い」)は、学問の意が無く20世紀以来の中国の平均的な教養水準の低下に符合する。水戸(茨城の県庁所在地)の年輩の知識人が余り有名でない「長橋臥波、未云何龍?復道行空、不霽何虹?」を諳^{そら}んじた事も、「六王畢、四海一。蜀山兀、阿房出。」に始まり「秦人不暇自哀、而後人哀之。後人哀之、而不鑑之、亦使後人復哀後人也。」で結ぶ同賦が、級友に対する教師の評語が契機で17歳の少年と出会い、父親に仕込まれた名詩と共に後の日本に於ける杜牧研究の大家の誕生を促した事も、大正まで保たれていた日本の漢字文化・漢学素養の深さを現す佳話である。

『月刊しにか』(大修館書店)で読者を対象とする「漢詩国民投票」が行われ(2002.4~6)、結果は総投票者が363人(作品・詩人部門1人最大各3票)しか無く、極少数の「漢詩民」(中国語の「^{ネット・シチズン}網民」を捩った造語)の好尚とも言えようが、杜牧は本国以上の人気で詩人部門の第3位(同じ69票の白居易と並列)を占め、「江南春絶句」「山行」は作品部門の第2位・(3首並列)12位(46票・16票)に選ばれた。『杜牧』に収録された「江南春絶句」は「千里鶯啼緑映紅/水村山郭酒旗風/南朝四百八十寺/多少樓臺煙雨中」(千里鶯啼^{せんりうぐひすな}き^{みどりくれなゐ}緑映^{えい}紅/水村山郭酒旗^{すいそんさんかくしゆき}の風/南朝^{かぜ}四^{なんてう}百^し八十^{ひやく}寺^{はちじうじ}/多少^{たせう}樓臺^{ろうだい}煙雨^{えんう}中^{うち})、「山行」は「遠上寒山石徑斜/白雲生處有人家/停車坐愛楓林晚/霜葉紅於二月花」(遠^{せう}上^{じやう}寒山^{せうけい}石徑斜^{なり}/白雲^{せうけい}生^ずる處^{あり}有人家^{あり}/車^を停^{めて}坐^に愛^す楓林^の晚^に/霜葉^は二^月の^花より^も紅^{なり})である。唐詩の名作が日本の言語・文学に与えた深遠な影響を物語る様に、『日本国語大辞典』の【水村】(語釈=「【名】水辺の村。水郷。)、【山郭】(=「【名】山ぞいの村。山にかこまれた村。また、山中の城郭)と【酒旗】(=「【名】酒屋の看板としてたてた旗。酒屋の看板の旗。また、酒屋。さかばた)は、「杜牧-江南春詩“千里鶯啼緑映紅、水村山郭酒旗風”」を漢籍典拠に挙げている。【多少】【名】の「㊦」(“少”は助字)多いこと。十分なこと」と【烟雨】(=「【名】煙るように降る雨。きりさめ。ぬかあめ。細雨)は、「杜牧-江南春詩“南朝四百八十寺、多少樓台烟雨中”」が漢籍典拠と為る。【寒山】の「■【名】冬の山。草木の葉が枯れ落ち、ものさびしげに見える山」と【石徑・石逕】(語釈=「【名】山道などの石の多い小道。石ころみち。

石路)の漢語典籍は、6字目の表記が違いながら「杜牧-山行詩“遠上寒山-石径/逕斜,白雲生処有-人家-”」である。漢籍典拠「杜牧-山行詩“停車坐愛楓林晚,霜葉紅於二月花-”」は、【停車】の「〔名〕①車がとまること。また、車をとめること。特に、列車・バスなどが駅や停留場などにとどまること」,【楓林】(=「〔名〕楓[かえで]の林」),【霜葉】(=「〔名〕霜のために黄や紅などに変色した葉。もみじ。紅葉」),乃至【二月】(=「〔名〕一年の第二番目に当たる月。一月の次,三月の前の月。節分,初午祭,涅槃会[ねはんえ]などの行事がある。きさらぎ。にがち。《季・春》)の項に出ている。【人家】の「〔名〕①人の住む家屋」の漢籍典拠「李中-寒江暮泊寄左偃詩“煙火人家遠,汀州暮雨寒”」は、五代南唐(937~75)の詩人(生歿年未詳,940年代~70年代存命)の作品なので,1世紀も早い杜牧の「山行」詩等を飛ばして引かれるのは順当とは言えない。初出用例の内に最も早いのは【楓林】の「文華秀麗集(818)上・江樓春望(小野岑守)」で,一番遅いのは【停車】の「広益熟字典(1874)〈湯淺忠良〉」であるが,「山行」の第3句の2語が千年を隔てて早期の和文用例と為った事は奇妙に思われる。『現代漢語詞典』『広辞苑』に無い「楓林」は『漢語大詞典』で,「楓樹林。楓葉至秋而變紅,甚美。詩文中常以楓來表現秋色。」(楓の林。楓の葉は秋に至って赤くなり,甚だ美しい。詩文で能く楓を以て秋色を表現する)と称賛を交えて紹介されている。出典3点の初出「唐杜甫《寄柏学士林居》詩:“赤葉楓林百舌鳴,黃花野岸天雞舞。”」は,作者逝去の8年後に生れた小野岑守おののみねもり(778~830,貴族・文人)の漢詩より数十年早いので,杜牧の2首の語句は『文華秀麗集』と【多少】②の初出「菅家文草(900頃)二・依言字重酬裴大使」から相継いで日本語に入ったが,10個も日本の漢単語の先駆を為したのは日本人をも魅せた名作の魅力の所産と言えよう。

『日本国語大辞典』の【杜牧】は漢籍典拠の高い利用度の割りには些か簡略的で,「中国晩唐の詩人。字(あざな)は朴之(ぼくし)。号は樊川(はんせん)。杜佑の孫。感傷と頹廢の色濃い詩風で,絶句にすぐれ,杜甫の老杜に対し小杜と呼ばれる。『樊川文集』『樊川詩集』がある。(八〇三~八五二)」と為る。『広辞苑』の「晩唐の詩人。字は牧之。号は樊川はんせん。京兆万年(陝西西安)の人。剛直で気節があり,詩は豪放,また艶麗で洒脱。杜甫に対して小杜と呼ばれる。書画にも秀で,兵法をよくし孫子の注釈がある。詩文集『樊川文集』。(樊川はんせん)」(歿年は第6版では853)と比べて,逝去時(年末)が旧暦採用の為か中国の通説より1年早い上に詩風の概括も一面的である。市野澤寅雄は愛国者・為政家の血性が盛んで自負が強い政治・軍事・軍備兵制評論家とし,詩風は淫蕩な処も有るが風骨が強く憂国詩人杜甫の詩史の系譜を継いでいると説いた。『辞海』の解説も「以濟世之才自負,曾注曹操所定《孫子》十三篇。感於藩鎮跋扈和吐蕃,回紇的攻掠,詩文中多指陳諷諭時政之作。小詩写景抒情,多清俊生動。也有一些詩寫他早年的縱酒狎妓生活。其詩在晩唐成就頗高,後人稱杜甫為“老杜”,稱牧為“小杜”。又与李商隱並稱“小李杜”。亦能文,《阿房宮賦》頗有名。有《樊川文集》。」(濟世の才を以て自負し,

曹操が確定した『孫子』13篇の注をした。藩鎮の跋扈と吐蕃・回紇の侵攻に感ずる処が有り、詩文に時の政治を指摘・諷諭する作品が多い。小詩は景色を描写し感情を吐露し、清麗で生き生きとした作が多い。又一部の詩は酒に溺れ妓に狎れる早年の生活を描く。その詩は晩唐に非常に高い成果を上げ、後人は杜甫を「老杜」と称し、牧を「小杜」と称す。又李商隱と並び「小李杜」と称される。文も能くし、『阿房宮賦』は頗る有名。『樊川文集』が有る）と記す。両国に於ける地位の差の一因は『広辞苑』の【唐詩選】の説明に手掛りが有り、「唐代詩人一二八人の詩選集。七卷。選者は明の李攀竜というが疑う説もある。五言古詩・七言古詩・五言律・五言排律・七言律・五言絶句・七言絶句、総計四六五首を取録。初唐・盛唐に傾き、中唐・晩唐の詩をほとんど収めない。日本には江戸初期に渡来し、漢詩の入門書として盛行」と言う通り、偏向が強い同書が日本で唐詩の精粹とされて来た事は排除された杜牧の普及を妨げている。『日本国語大辞典』の「中国の詩撰集。七卷。中国、明の李攀龍撰と伝えられるが書籍商人の偽託という。唐代の詩人一二八人の作品四六五首を詩体別に収録。唐詩正統派の格調を伝える。中国では明末、清初に流行したが、『四庫全書総目提要』が偽書と断定されてからすたれた。日本には江戸初期に伝来していたとされるが、特に注目されるようになったのは、江戸中期の萩生徂徠ら古文辞派の活動による。服部南郭による校訂本が享保九年（一七二四）に刊行されて以来、唐詩入門書として爆発的に流行した」は、近・現代の中国で見向きもされない状況との対照から両国の温度差を感じさせる。

『広辞苑』の【初唐】は「中国の唐代を詩史の上から四分した、その最初の時期。武徳初年から玄宗即位の前まで（六一八～七一二年）。陳子昂・張九齡らが出、また王勃・楊炯・盧照隣・駱賓王の四詩人を初唐の四傑と称する」、【盛唐】は「第二期」を「開元から永泰まで（七一三～七六五年）。孟浩然・王維・李白・杜甫らの出た唐詩の最盛期」と記し、「第三期」の【中唐】は「大暦から大和まで（七六六～八三五年）。錢起・孟郊・韓愈・柳宗元・白居易・李賀らの出た時代」と規定し（「大和」は第6版では「太和」）、【晩唐】の「第四期」は「開成から天祐まで（八三六～九〇七年）。杜牧・李商隱・温庭筠らが出た」とする（第6版では「李商隱・杜牧」の順）。『辞海』の【四唐】では詩史区分に由来し唐代の歴史にも適用される初・盛・中・晩4期は、同じ①唐初～玄宗開元、②開元～代宗大暦、③大暦～文宗大（太）和、④大（太）和～唐末とする説（[明]高棅〔又名廷礼、1350～1423、唐詩選評家〕『唐詩品匯』[93年90巻成り、98年増補10巻]）の他、①高祖武徳～玄宗開元初、②同上、③大暦～憲宗元和末（820）、④文宗開成（836）～五代（907～60）とする説（[明]徐師曾[1517～80、官吏・学者]『文体明辨』[73]）も併記してある。③と④の間に長慶・宝暦・大（太）和の16年が抜けた後者の不備も指摘されているが、区切り方の違いはともかく初・盛・中・晩の4分は長い王朝の歷程を巧く締め括れる。盛唐には社会の安定・経済の繁昌と秀作の多産の相関・連動が見られたが、動乱を経て衰滅へと向う途中の中・晩唐の詩壇の鬱勃も悲哀・憤

怒の創造力を見せている。盛唐は「詩仙」李白・「詩聖」杜甫・「詩仏」王維 (701 頃～61) 等で輝いた黄金期に違いないが、「唐宋八大家」の筆頭と為る韓愈 (768～824) や「人才」白居易・「鬼才」李賀 (790～816) 等が活躍した中唐も、「小李杜」の李商隱 (813 頃～58 頃)・杜牧が有終の美を飾った晩唐も、^{スター}大明星が居ない初唐よりは千年後の総合的な評価が高いはずである。『唐詩選』の「詩必盛唐」(詩は必ず盛唐)の拘りの誤りと共に、正統とした盛唐の名家の名作に対する取捨も擬古主義文学観の偏りが目に余る。『広辞苑』の【杜甫】は「盛唐の詩人。字は子美、号は少陵。鞏^{キョウ}県 (河南鞏義) の人。先祖に晋の杜預があり、祖父杜審言は初唐の宮廷詩人。科挙に及第せず、長安で憂苦するうちに安祿山の乱に遭遇。一時左拾遺として宮廷に仕えたが、後半生を放浪のうちに過ごす。その詩は格律厳正、律詩の完成者とされる。社会を鋭く見つめた叙事詩に長じ、「詩史」の称がある。李白と並び李杜と称され、杜牧 (小杜) に対して老杜という。工部員外郎となったので、その詩集を『杜工部集』という。(註^レ話)」(『鞏義』は第6版では「鄭州」)、『日本国語大辞典』の紹介は「中国の盛唐の詩人。字 (あざな) は子美。少陵と号し、工部、老杜などと呼ばれる。晋の杜預を遠祖とし、祖父は初唐の詩人杜審言。中年には安祿山の乱に遭って幽居されるなど波乱の生涯を送った。『兵車行』『北征』『秋興』など多くの名作を残し、その詩風は写実的で力強く、沈痛の風趣があり、日本でも西行や芭蕉などの旅の詩人が尊び愛唱した。後世、詩聖と呼ばれ、李白とともに李杜と並び称される。詩文集に『杜工部集』。(七一〇～七二〇)」と言うが、第1・2に挙げられた『兵車行』『北征』は『唐詩選』では選りに選って選に漏れた。「漢詩国民投票」の作品部門で1位 (84票) に輝いた杜甫の五律『春望』も選外だったので、その「国破山河在、城春草木深。」(国破れて山河在り、城春にして草木深し) に対する昨今の共感は、『唐詩選』渡来・流行の江戸の繁栄と異なる昭和の敗戦が契機で高まった様に思える。

民衆が辺境の戦に駆り出されて一家離散と為る光景を嘆く悲憤の楽府『兵車行』(752) は、冒頭の「車^{くるまりんりん}鞞^{うましようしよう}、馬^{こうじん}蕭蕭、行人^{きゅうせん}の弓箭^{おのの}各在腰。」(車鞞、馬蕭蕭、行人の弓箭各腰に在り) が名高い。同じ頃の楽府『前出塞 九首』の「六」の書き出しもその兵器の対を含み、「挽弓当挽強、用箭当用長。」(弓^ひを挽^ひかば当^{まさ}に強きを挽くべし、箭^やを用いば当^{もち}に長きを用うべし) と詠む。次の「射人先射馬、擒賊先擒王。」(人を射ば先ず馬を射よ、賊を擒にせば先ず王を擒にせよ) は、日本語の「人を射んとせば先ず馬を射よ」の由来である。『広辞苑』の当該項目は「[杜甫、前出塞詩 “人を射んとせば先ず馬を射よ、敵を擒^{とり}にせんとせば先ず王を擒にせよ”] 敵を屈服させ、または人をわが意に従わせようとするならば、まずその頼みとするものを屈服させることが成功する道である。将を射んと欲すれば先ず馬を射よ」と為り、『日本国語大辞典』では類似の語釈に用例の「社会百面相 (1902) 〈内田魯庵〉犬物語 “人を射んと欲する者は先ず馬を射よ”」が付くが、漢籍典拠「杜甫 - 前出塞詩 “射^レ人先射^レ馬、擒^レ敵先擒^レ王”」は中国で一般的な「賊」を変えている。上記の訳で参照した目加田誠 (1904～94) 著『漢詩選 9

杜甫』（集英社、1996）でも、原文・和訳は「擒敵先擒王 敵を擒にせば先ず王を擒にせよ」である。同書の「戯為六絶句 戯れに六絶句を為る」の「一」の結句「不覺前賢畏後生 覺えず前賢の後生を畏るるを」に就いて、注で「この句はよくわからない。諸説があるが今仇氏に従う。後生可畏とは孔子の語。前賢は庾信。後生はこれをわらう人」と記されるが、「擒敵先擒王」に関しては中国の版本の「賊」に触れる注記が無い。彼の高名な古典中国文学者は『詩経』・唐詩等の翻訳・解説の著作が多数有り、昭和に次ぐ新元号の最終候補3案中の「修文」を考案した⁴⁷ 漢籍研究の権威者だけに、杜甫の戦争詩（「戦争文学」に因んだ造語）の「賊」が日本で「敵」に為る変容は興味を引く。

『広辞苑』の【賊】の「①ぬすむこと。ぬすみ。ぬすびと。“一を捉える”②不忠者。叛逆をなす者。悪事をなす者」に対して、『日本国語大辞典』の「〔名〕①他人に危害を加えたり、他人の財物を略奪破壊したりする者。悪事をはたらく者。ぬすびと。盗賊。賊徒。賊人（ぞくにん）。②君主・国家などにそむく者。また一般に、反逆する者。不忠者。むほん人。国賊。逆賊。賊臣。賊人」の次に、「③（形動）悪事を行なうさま。害のあること」の意をも持つ。①に「今昔（1120頃か）一二・一三」等3点の用例と漢籍典拠「戦国策－斉策－閔王下“拔賊於樽俎之間，折衝席上者也”，2に「続日本紀－宝亀一一年（780）二月丁巳」等2点の用例と漢籍典拠「漢書－高帝紀上“項羽為無道，放殺主，天下之賊也”」が有るが、和製語義の③の用例2点の初出も中国所縁の「中華若木詩抄（1520頃）上“伍子胥は、情のこわい者也。恩少く賊なる者ぞ”」である。『現代漢語詞典』の【賊（賊）】の①「図偷東西的人。」（図物を盗む人）から派生した②は、「做大壞事的人（多指危害国家和人民的人）：工～|売国～。」（大きな悪事をする人[多くは国家と人民に危害を加える人を指す]。「労働者運動の叛逆者」「売国賊」）である。『日本国語大辞典』の【賊】の成句項に【ぞく過（す）ぎて＝弓（ゆみ）を張る [=後（のち）の張弓（ちょうきゅう）]]」が有り、「賊が去ったあとで弓の準備をする。時期を逸して効果のないことのとえ。けんか過ぎての棒ちぎり」の意は、『現代漢語詞典』の【賊走関門（賊が去って門を閉じる）の「比喻出了事故才采取防范措施」（事故が起きた後で初めて予防措置を取ることの比喻）と通じる。同義の【賊去関門】も有るほど能く使われる四字熟語の中の「賊」は盗賊であるが、『広辞苑』に無い【賊過ぎて弓を張る】の「賊」は弓で迎撃する強敵の形象が強い。用例2点の初出「文明本節用集（室町中）“賊過後張弓（ゾクスギテノチノチャウキウ）”」は、室町時代（1392～1573、又は南北朝時代[1336～92]を含む）の表現として歴史が古い。「挽弓当挽長」「擒賊先擒王」の「弓・賊」と重なるだけに、現代日本に於ける死語化と「擒賊」→「擒敵」の和風化が考えさせられる。

『現代漢語詞典』の熟語項【擒賊擒王】は杜甫の用字に従って、「捉拿賊寇应当先捉住賊寇的头領，有時用來比喻做事要抓關鍵。也說擒賊先擒王。」（盗賊を捉えるのに先ず盗賊の頭領を捉えるべきだ。事を為すのに急所を押えなければならないことを喩える場合が有る。「擒賊先擒王」

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (3) (夏)

とも言う)である。【擒】の「勳抓；捉拿」(勳捕まえる。拿捕する)の用例にも、「生～|欲～故縱」(「生け捕りにする」「後で捕まえようとして故意に解き放つ。問題を明らかにする為に泳がせる」)の後に「～賊先～王」が出る。『日本国語大辞典』の【擒】の語釈は「『名』とりにすること。俘虜」で、「日本外史(1827)六・新田氏正記“笠置既陥。宗良就擒”」等2点の用例と、漢籍典拠「戦国策-燕策“両者不_レ肯_二相舎_一、漁者得而並擒_レ之”」が付く。【生擒・生禽】は「『名』いけどりにすること。生獲」と説明され、「魏志-李通伝“生_二禽_一黄巾大帥呉覇_一、而降_二其属_一”」に由来し、用例4点の初出は「性海靈見遺稿(1396頃)虎関和尚七周忌陞座“活捉生擒与奪_二自在_一”」と為る。約430年後に現れた【擒】の初出に有る「就擒」は、「『名』とらえられること。とらえられて、縄をかけられること」の意で、「広益熟字典(1874)〈湯浅忠良〉」の用例の後の漢籍典拠は、異例の2点(其々「生禽」「生擒」と書く「新唐書-李絳伝」「宋書-武帝紀」)が有る。『広辞苑』には【生擒】(=「いけどること。いけどり」)しか無いが、『現代漢語詞典』では【生擒】(=「勳活捉[敵人、盗匪等]:~活捉。」「勳<敵・盗賊等を>生け捕りにする。」「生擒する」)の他、【就擒】(=「勳被捉住:束手~。」「勳捉えられる。」「手を拱こまぬいて捉えられる」)、【活捉】(勳活活地捉住、多指在作戰中抓住活敵。勳生きた儘に捉える。多く作戦で敵を生け捕りにすることを指す)も有る。「生擒」の和文初出に見える「活捉」は『日本国語大辞典』にも入らないが、日本の漢単語に「被捕」(逮捕される)や「被俘」(俘虜にされる)が無い事も興味深い。陸軍大臣東条英機(1884~1948)が示達した「戦陣訓」(41.1.8)に、「生きて虜囚りよしゅうの辱はずかしめを受けず、死して罪禍の汚名を残すこと勿なかれ」と有る。「本訓 其の二」の「第八 名を惜しむ」に在る事は、「恥の文化」と「名の文化」の相互内包と日・中の共有を思わせるが、「生擒」の使用頻度の差に窺える両国の戦乱の歴史・程度の違いはともかく、『現代漢語詞典』の【活捉】の語釈が示す様に「敵」と「賊」は別物である。

拿捕を表す「擒」も敵・悪者を貶す「賊」も当代の日本では殆ど見掛けないが、敵意を剥き出し殺気を漂わせる「詩聖」の名句は中国では鬪志鼓舞・戦法教示の働きを持つ。「挽弓当挽強、用箭当用長。」に含まれる中国語の「用強」は、「強面こわもてを使う」「強硬手段こわもてを用いる」「力ず尽く乱暴(特に性的暴行)する」意が有る。関連の「霸王硬上弓」(霸王力尽く弓を挽く)は、秦王朝(前221~前206)を滅ぼして楚王と為った武将項羽(名は籍、前232~前202)の怪力の伝説に因んで、嫌な事(俗語では性行為)を無理強いすることに言い、又籃球バスケット・ボールで複数の守備選手が居る敵陣の得点区画下に突入し投球する攻撃を指す。「攻」と同音(gōng)の「弓」を含むこの熟語・俗語は、強引・強行・強攻・強暴(中国語では強姦の意も有る)の性格が強過ぎる。一方、「強・弓」の弩(機械の力を用いる大弓)の『現代漢語詞典』の例示は、「剣拔~張」(該当項目=「形容形勢緊張、一触即発。」「形勢が緊張し、一触即発の様の形容」)である。第7版に追加された【開弓没有回頭箭】は、「箭已射出就無法收回、比喻事情既然已經開始、

就必須一直做下去：～，改革関頭勇者勝。」（箭は射られた後もう戻せない。事が始まった以上、ずっとして行かなければならないことの比喩。「弓から放たれた箭は戻らず，改革の関頭では勇者が勝つ」）である。『広辞苑』の【乗りかかった船】の「[船に乗った以上は途中で下船できない意から] いったん着手した以上，中止するわけにはゆかないこと。“一で，あとへは引けぬ”」と比べて，熟語も用例も戦争に見立てる点に中国的な「先軍」特色が感じられる。

「開弓没有回頭箭」に近い成句としてカエサル（前100頃～前44）の名言が思い泛ぶが，中国語で「色子/骰子已經（被）擲下」と訳されるその豪語は『広辞苑』の【采は投げられた】で，「（カエサルのルピコン渡河の際の言葉という）事ここに至った以上は断行するほかはない。後戻りはできない。事すでに決す」と説明されている。『日本国語大辞典』の【采・賽・骰子】の内の【さいは投（な）げられた】の語釈は，「(㊦ Alea jacta est” の訳。スエトニウス著『帝王伝』から) カエサル（シーザー）がルピコン川を渡るときに言ったといわれることば。いったん乗り出してしまった以上，もはや最後までやるよりほかに道はない，という意味で使われることが多い」で，用例は「プウランジェ將軍の悲劇（1935-36）〈大仏次郎〉四月一日・四“勝てば内閣を倒して堂々と巴里に入城出来るのである。賽（さい）は投げられた。牢獄を捨てて亡命の道を選んだのは將軍の氣質の然らしめたところとも云へるだらう”」である。中国で普及度が低いのは日本以上に使用歴が短い等の原因と共に，「破釜沈舟」（釜を破り舟を沈む）の故事・熟語が有る事も一因であろう。「霸王硬上弓」の主役の壮挙及び転義を記す『現代漢語詞典』の項は，「項羽跟秦兵打仗，過河後把鍋都打破，船都弄沈，表示不再回来（見於《史記・項羽本紀》）。比喩下决心，不顧一切干到底。」（項羽が秦軍との戦に，河を渡った後に釜を全て破り，船を全て沈め，再び帰らない決意を示した[『史記』『項羽本紀』に見える]。一切を顧みず最後まで行き通すよう決心を下すの比喩）と為る。『日本国語大辞典』の【糧・粮】の成句項に【かてを棄（す）てて船（ふね）を沈（しず）む】が有り，「（楚の項羽が船を沈め，かまの類をこわし，小屋を焼いて，全軍に必死の気持を持たせて決戦したという『史記-項羽本紀』に見える故事から）生きて帰らない覚悟をするたとえ。決死の覚悟で戦う」の意に，用例「太平記（14C・後）九・足利殿著御篠村則国人馳参事“粮（カテ）を捨て舟を沈む謀をこそ致さるべきに，今日より臙（やが）て後足を踏（ふん）で，纒（わずか）の小城に楯籠（たてこも）らんと”」が付く。『広辞苑』の【糧を棄て船を沈むる謀^{はかり}】（＝「楚の項羽が鉅鹿^{こほく}の戦いに，釜を破り，小屋を焼き，船を沈めて，士卒に生還の志を抱かせなかったために，大勝利を得たという故事。必死の覚悟で敵と決戦すること」）は，日本の歴史文学中の最長（40巻）と為る軍記物語の用例に従って「謀」を添えているが，深淵に臨む死地に自軍を置く「破釜沈舟」は自負の戦力に裏打ちされた深遠な「謀」も有り，士氣奮起の為に自滅も辞さぬ様に見える悲壮な「勇」ばかり強調するのは皮相的である。

「改革関頭勇者勝」の「関頭」は『現代国語詞典』で，「[㊦]起決定作用的時機或転折点：緊要

～| 危急～。(⊕決定的な作用を持つ時機或いは転換点。「緊要な関頭」「危急な関頭」と解釈・例示されている。『広辞苑』の「わかれ目。せとぎわ。“生死の一に立つ”)も一定の使用頻度を示すが、『日本国語大辞典』の「〔名〕物事の重大なわかれめ。岐路。また、重要な点。大切な時」は、「肉体の悪魔 (1946) 〈田村泰次郎〉“焦土となった故国に送り帰され、いま亡国の関頭にあつて、私はようやくにあの頃の君の心の苦悩がわかりかけている”」等2点の用例しか無い。『漢語大辞典』の㊦ (語釈は『現代国語辞典』に同じ) には和製でないことの証として、「明謝肇淛《五雜俎・人部四》：“死生之際，一生学問之大関頭也。”」等3点の出处が有る。他にも蒋介石は国民党「5大」(1935.11.12～22, 南京)で戦争危機下の対日外交に就いて、「和平未到完全絶望時期，決不放弃和平；犠牲未到最後関頭，亦決不輕言犠牲。」(平和が未だ絶望の時期に到らないと，決して平和を放棄しない。犠牲が最後の関頭に到らないと，決して犠牲を軽々しく言わない)と述べた。盧溝橋事変の10日後(1937.7.17)に各界人士が参加する第2次「廬山談話会」で、「全国国民最要認清，所謂最後関頭の意義；最後関頭一到，我們只有犠牲到底，抗戰到底。」(全国の国民は所謂最後の関頭の意義を，最もはっきり認識しなければならない。最後の関頭に到ると，我々は最後まで犠牲を払わなければならない，最後まで抗戦しなければならない)と語った。1935年に生れた『義勇軍進行曲』(「進行曲」=行進曲。田漢作詞，聶耳作詞)に、「中華民族到了最危險的時候！」(中華民族は最も危険な時に到った!)と有る。最後の関頭に直面する人々の「最後の吼声」(最後の^{おたけ}雄叫び)は，中共政權の代(暫定) / 正式国歌(1949.10.1～78.3.4 / 82.12.4～)と為った。周恩来は採用の理由として「居安思危」(安に居て危を思う。『現代漢語辞典』の項=「处在安定的環境而想到可能会出現的危難。」[安定した環境に居て出現し得る危難を考える])を挙げたが，中国では平和の時代に入っても「日日是好日」ならぬ「日日是危日」の影が消えない。

『現代漢語辞典』に無い「勇者」は『広辞苑』で「勇気のある人。勇士」と為り，成句の【勇者は懼れず】は「[論語子罕“知者は惑わず，仁者は憂えず，勇者は懼れず”]勇者はどんな困難にもおそれることはない」である。『日本国語大辞典』では同じ語釈に異読「ようしゃ」が付き，「平治(1220頃か)下・頼朝義兵を挙げらるる事“忠宗・景宗も，随分血氣の勇者にて”」等5点の用例のみが有るが，【ゆうしゃは懼(おそ)れず】の語釈「勇者はいかなる困難をも恐れないで立ち向かっていく。→知者(ちしゃ)は惑わず勇者は懼れず」と，「文明本節用集(室町中)」の用例の後に，語源の「論語-子罕“知者不_レ惑，仁者不_レ憂，勇者不_レ懼」が引いてある。「改革関頭勇者勝」は日本語で「関頭」と同音の「敢闘」を奨励する命題と言えるが，『広辞苑』の【敢闘】の「勇敢にたたかうこと。敢戦。“一賞”」に対して，『日本国語大辞典』の項は「〔名〕勇敢にたたかうこと。よくたたかうこと。敢戦。*彼の歩んだ道(1965)〈末川博〉四“何々の場合には突撃すべしといったような日本陸軍独特の敢闘精神を表わす条項もなかったわけではないけれども” *新唐書-王忠嗣伝“忠王言-於帝-曰，忠嗣敢闘恐亡_レ之，由_レ是

召還”である。旧日本軍の精神を言う戦後の例は歴史が浅いながら肯定的な意味に転じて能く使われるが、漢籍典拠が有るのに『現代漢語詞典』に無いのも意外である。「改革関頭勇者勝」は「両軍相遇勇者勝」（両軍が相遇すれば勇敢な方が勝つ）、又は「狭路相逢勇者勝」（狭路で相逢えば勇者が勝つ）に擬えた表現の様に思えるが、改革を戦争に譬える習近平時代の疑似新語（造語）は「先軍」伝統・英雄主義を貫いている。

「恒産・恒心」の相関と「幽閑・憂患」の相反

『現代漢語詞典』の【相逢】は「動彼此遇見（多指事先没有約定的）」（動出会う〔多くは事前に約束していない場合を指す〕）の意で、用例「萍水～」（萍水相逢^{（へい さい あい あ）}）の次の「狭路～」は当該項目で、「在很窄的路上遇見了，不容易讓開，多指仇人相遇，難以相容。」（狭い道で出会い、道を譲ることが容易でない。多くは敵^{かたき}同士が出会い、相容れ難いことを指す）と説明される。同辞書にも『広辞苑』にも無い【狭路】は『日本国語大辞典』には収録しており、「《名》幅のせまい道路。こみち。隘路（あいろ）」の用例は「広益熟字典（1874）〈湯浅忠良〉」等2点、漢籍典拠は「古楽府－相逢狭路間“相_二逢狭路間_一，道隘不_レ容_レ車”」である。「狭路相逢」の語源「相逢狭路」の中の「相逢」も音読みの形で日本語に入っていないが、【淪落】（語釈＝「《名》おちぶれること。また、墮落すること。零落。沈淪」，用例＝「扶桑集〔995－999頃〕七・五嘆吟〈源順〉」等5点）の漢籍典拠は、この単語を含む「白居易－琵琶行“同是天涯淪落人，相逢何必曾相識”」である。「相識」も日本語に取り入れられている（『広辞苑』の項は「互いに知り合っている仲。知人」，『日本国語大辞典』の語釈は「《名》互いに知り合っていること。また、その人。知人」，漢籍典拠は「礼記－曾子問」，用例は「正法眼蔵〔1231－53〕安居」等5点）だけに、白居易の詩が存命中から伝来し日本文学に多大な影響を与えたにも関わらず、「長恨歌」と双璧を為す名作の名句中の「相逢」が輸入語から除外されたのは奇妙である。『現代漢語詞典』の【相識】の①「動彼此認識」（動互いに知っている）と②名相識的人（名互いに知っている人）には、其々用例の「素不～|～多年」（「一面識も無い」「長年知り合っている」）と「旧～|老～|成了～」（「旧知」「古い知人」「知り合いに成った」）が有る。高い使用頻度は日本の10倍にも為る人口に正比例する出会いの多さを思わせ、『広辞苑』の名詞のみと対照的な両品詞の語義の分別と動詞の先行から、「相識」の字・義にも現れる中国の「対の思想」と能動型の発想が感じ取れる。

「相識」の和文初出の文献名に有る両言語共通の「安居」は、「相逢」の有無や「相識」の多寡の深層の国情を認識する手掛りに為る。『広辞苑』の「①心を安らかにして暮らしていること」に対応する『日本国語大辞典』の《名》Ⅰは、「心安らかに暮らすこと。落ち着いた生活をすること」の意で、「将門記（940頃か）」等5点の用例と漢籍典拠「孟子－滕文公・下“一怒而

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (3) (夏)

諸侯懼，安居而天下熄”が示される。『現代漢語詞典』の「**匱**安定地居住、生活」(匱**安**定的に居住・生活する)は、**精神的な安定の前提を為す物理的・社会的な生存基盤に重みが置かれる**。用例「置業～」の「置業」は「**匱**購置産業(如土地、房屋等)」(匱**不**動産等の)財産[土地・家屋等の類]を購入する)意で、この「置業」は**図①**の「土地、房屋、工廠等財産(多指私有的)。(土地・家屋・工場等の財産[多くは私有の物を指す])」である。『日本国語大辞典』の【産業】《名》の「**匱**生活をいとむための仕事。さまざまの職業。なりわい。生業。さんごう。また、資産、財産」は、「続日本紀-大宝元年(701)九月戊寅」等6点の用例しか無く和製漢語と認識されるが、『漢語大詞典』の**①**「指私人財産，如田地、房屋、作坊等等」(個人の資産を指す。田地・家屋・手工業の工場等の類)と**②**「生産事業」には、「《韓非子・解老》：“上内不用刑罰，而外不事利其産業，則民蕃息。”」等5点と「《史記・蘇秦列伝》：“周人之俗，治産業、力工商，逐什二以為務。”」等4点の出典が有る。資財・生業・生産事業を表す「産業」の用例に中国語でも同音の(zhì)の「置・治」の対が出るが、「有恒産者有恒心」は**民衆の経済的な余裕の常態化が治世の安定に繋がることを示唆する**。

『孟子』「滕文公章句上」に、「滕文公問為國。孟子曰：“民事不可緩也。『詩』云：‘晝爾於茅，宵爾索綯。亟其乘屋，其始播百穀。’民之為道也。有恒産者有恒心，無恒産者無恒心。苟無恒心，放辟邪侈，無不為已。及陷乎罪，然後從而刑之，是罔民也。焉有仁人在位，罔民而可為也。”」(滕の文公くにをおさむることを問う。孟子曰く、「民事は緩うす可からざる也。『詩』に云う，“晝は爾於なんじきて茅かやかれ，宵は爾索をよる綯え。亟に其屋になわれ，其始めて百穀を播すみやかせん。”民之為道はそれおくも恒産有る者は恒心有り，恒産無き者は恒心無し。苟くも恒心無ければ，放辟邪侈，為さざる無き已。罪に陥るに及んで，然る後に従って之を刑す，是民を罔する也。焉んぞ仁人位に在る有りて，民を罔することを而も為す可けん也。”)」⁴⁸⁾と有る。治国の道を教える聖人は「民事」(民の生存・生活に関する事柄)を要務とし、『詩経』「**爾風**・七月」の1節を引いて穀物の種ま蒔きの準備等の農事の大切さを強調した。昼間に茅を刈って夜に縄をか縋い、家に屋根に上って破れた処を修繕して置く，という「五経」中の詩集の提言は**農業国の風土の所産**である。恒産と恒心との密接な相関に基づいて恒産・恒心の欠如の害が説かれ，恒心が無いと放恣・偏頗・邪悪・身勝手等が横行して歯止めが効かなくなるが，其処でそれを断罪し刑罰に処すのは民を予め張って置いた網の中に追い込む様な事で，仁者が位に就いているなら民を陥れる事は敢えて為しても可かろうか，勿論行けない，と孟子は喝破した。1982～86，2004～18年の中央「1号文件」の「三農問題」特化は同じ農事重視の姿勢であるが，民生整備の不十分で社会秩序の乱れを起す基礎的セーフティーネットな安全網の不備は未だ直っていない。

『現代漢語詞典』の【恒産】は「**匱**指田地房屋等比較固定的産業；不動産。」(匱土地・家屋等の比較的固定した[私有]財産。不動産)で，【恒心】は「**匱**長久不變的意志:學習要有～。」(匱長らく変えない意志。「勉強には恒心が要る」)と説明・例示されている。『広辞苑』の【恒

産」は「①定まった財産。②一定の生業」の両義で、【恒心】は「常に保持してかえない心。ぐらつかない心。“恒産なき者は一なし”と為り、【恒産なきものは恒心なし】は「[孟子滕文公上] 一定の生業や収入のない人は常に変わらぬ道德心を持つことができない。生活が安定していないと精神も安定しない」である。『日本国語大辞典』の【恒産】の「〔名〕 ①一定の財産。ある定まった資産。また、恒常的にはいつてくる作物、金銭などをいう。②安定した職業」は、其々「東海一瀛集 (1375 頃) 一・答不聞」等 4 点と「東巡録 (1876) 〈金井之恭〉五・奏対」の用例が有る。【こうさん = なきものは [なければ] 恒心 (こうしん) なし】の解説は、「『孟子-梁恵王上』また『孟子-滕文公上』にみえることば) 定まった財産や決まった職業のない人は、定まった正しい心がない。物質生活は人の心に大きな影響を持つもので、それが安定しないものには確固とした道德心も無い。恒 (つね) の産なきは恒の心なし」で、用例は「侏儒の言葉 (1923-27) 〈芥川龍之介〉恒産」等 2 点である。【恒心】の語釈は「〔名〕 常に持っていて変わらない正しい心。しっかりした、ぐらつかない心」で、用例 3 点の初出「童子問 (1707) 中・七一 “孟子雖_レ屢言_レ心、亦皆指_レ仁義之良心_レ而言。所謂本心恒心、是也」は、江戸時代の日本に於ける孟子の影響の大きさを思わせるが、漢籍典拠「孟子-滕文公上 “有_レ恒産_レ者、有_レ恒心_レ、無_レ恒産_レ者、無_レ恒心_レ”」の成句は『現代国語詞典』には出ない。中国は「三農」^{テーマ}主題の「1号文件」の連発再開の 2004 年から孔子学院を海外に広げて来たが、自国の教育も儘に為らない状況下の「軟実力」^{ソフト・パワー}作戦で儒教の祖の名を借りているものの、【孔孟之道】(孔孟の道) は『現代漢語詞典』の除外が示す様に主流思想の排斥を受けている。対照的に『広辞苑』には【孔孟の教え】が有り (= 「孔子と孟子の説いた仁義の教え。すなわち儒教・儒学」)、『日本国語大辞典』の同項目 (語釈は「〔名〕 孔子と孟子が説いた教え。儒教」) は、用例「東京学士会院雑誌-四 (1883) 日本堂徳学の種類 (西村茂樹) “孔孟の教を奉ずる者 孔子の教日本に入りてより殆ど二千年”」に、毛沢東時代に「封建思想」と決め付けられた儒教に対する日本人の尊敬の伝統が窺える。

司馬遼太郎の『この国のかたち』の原案の「土」^{くに}の表記は農耕民族の心性を反映し、日本の高度成長期の列島開発や泡沫経済にも古来の土地本位の観念が顕著に現れた。中共政権も鉄砲から生れた「先軍」性と共に「土地革命戦争」が懐胎の初期に当るが、『現代漢語詞典』の当該項目で語釈と為る「第二次国内革命戦争」は、「1927—1937 年中国人民が中国共産党領導下 反対国民党反動統治的戦争。這期間、党領導人民在許多省份开辟了農村根拠地、實行了土地改革、成立了工農民主政府、建立了中国工農紅軍、多次粉碎了国民党反動派的“圍剿”、勝利地進行了二万五千里長征。也叫土地革命戦争。」(1927~1937 年に、中国人民が中国共産党の指導の下で行った、国民党の反動的支配に反対する戦争。その間、党は人民を指導して多くの省で農村根拠地を作り、土地改革を行い、労働民主政府を成立し、中国労働赤軍を創建し、国民党反動勢力の「討伐」を幾度も粉碎し、2万5千里の長征を勝利の内に遂げた。「土地革命戦争」

とも言う)と詳解されている。見出し語と重なる「土地改革」は略称の【土改】の項も有り、主項目は「対封建土地所有制進行改革の運動。我国的土地改革運動，是在中国共产党領導下，發動農民沒收地主的土地和生產資料，分給無地或少地的農民。簡稱土改。」(封建的土地所有制を改革する運動。我が国の土地改革運動は、中国共産党の指導の下で、農民を動員して地主の土地と生産手段を没収し、土地の無い或いは少ない農民に分けたのである。略称「土改」)である。件の標的は【地主】**図の①**「旧時農村中占有土地，自己不労働，以出租土地剝削農民為主要生活来源的人。」(旧い時代に農村で土地を占有し、自ら労働せず、土地を貸し付けて農民を搾取することを主な生活の基盤とした人)で、対応する日本語の「寄生地主」は「小作農民に土地を貸し付けて高率の小作料を取得するだけで、自らは農業経営にたずさわらない地主。日本では、寄生地主制が明治維新後の地租改正を契機として発展し、第二次大戦後の農地改革まで存続」(『広辞苑』)である。『日本国語大辞典』の同項目の同じ行に『広辞苑』に無い【犠牲者】が有る(語義は「『名』ある目的のために、身命や大切なものをささげたり、だいなしにしたりした人。または、事故や天災などで死んだ人」、用例は「青春(1905-06)〈小栗風葉〉秋・一五」等)が、**中国の土地改革では多くの地主及び家族は恒産乃至身命を失う「犠牲品」にされた。**

『現代漢語詞典』の【犠牲品】の説明・例示は、「**図指成爲犠牲対象的人或物(多指不值得): 這対青年成了包辦婚姻的～。**」(図犠牲対象に爲る人或いは物を指す[多くは犠牲に爲る価値が無い場合を指す]。「この2人の若者は当事者の意志を構わずに結ばれる婚姻の犠牲者と爲った」)である。**人間のみに適用する日本語独特の「犠牲者」と比べて物品の形象が強く、主に無益・不用・不本意の犠牲を表す意味は字面にも現れる。**【犧】の「〈書〉做祭品用的毛色純一的牲畜: ~牛。」(〈書〉祭祀の供え物に用いる、毛色が純一の家畜。「祭礼用に飼われた牛」)に対して、『広辞苑』の「天地・宗廟を祭る際、祭壇に供えた生きた動物。もと純白の牛を用いた。いけにえ」、『日本国語大辞典』の「『名』神をまつるときに供える生き物。いけにえ。元来は、昔、中国で、社稷、宗廟の祭典に、純白の牛をいけにえとして殺し、その血を盤に盛って神にすすめた、その白い牛」はより詳しい。『広辞苑』に無い「牲」の『日本国語大辞典』の項は、「『名』いけにえとされる牛。また、いけにえとするもの。犠牲。*春秋公羊伝-僖公三一年“曷爲或言_レ免_レ牲或言_レ免_レ牛。免_レ牲礼也、免_レ牛非_レ礼也” *春秋公羊伝-宣公三年“帝牲不_レ吉則扱_レ稷牲_レ而ト_レ之”」と、「春秋三伝」の1つである『公羊伝』(11卷、公羊高[戦国時代の齊の学者、孔子の門人子夏[姓名は卜商、孔子より44歳若いとされる]に師事]伝述、筆録者はその玄孫の寿と弟子の胡毋生等)を2点も引いているが、『現代漢語詞典』の**②**「古代祭神用的牛、羊、猪等: 献~。」(古代に神を祭るのに用いた牛・羊・豚等。「牲を献ずる」)の前に、**牧畜が盛んな国情を映す①**「家畜: ~口 | ~畜。」(家畜。「役畜」「家畜」)も有る。「犠牲」は2字の語義の通り家畜の屠殺で流血・死亡を伴うから酷な事であるが、両言語の意味に

は意志の有無を峻別するか否かの違いが見られる。

『日本国語大辞典』の【犠牲】〔名〕の①神，天地，宗廟（そうびょう）などをまつときに供える生き物。いけにえ。人身御供（ひとみごくう）」は、「*哲学字彙（1881）“Sacrifice 祭祀，犠牲，血食” *礼記－月令“孟春之月，〈略〉祀不用_レ犠牲_一，用_二圭璧_一”」が用例・漢籍典拠と為り，「②ある重要な目的のために，身命その他貴重な事物をささげること。すべてをなげうって，つくすこと。自発的にでなく，強制されるものに，また，偶発的な事故や自然災害に出会った場合についてもいう。また，それらの損害を受ける物件。また，そのもの」の用例3点中，最初の「寛永版曾我物語（南北朝頃）五・呉越の戦の事」は中国所縁で，次の「清国に対する宣戦の詔勅－明治二七年（1894）八月一日」も中国と関る。『広辞苑』の①は「〔礼記月令〕天地・宗廟を祭る時に供える生きた動物。いけにえ。また，供儀_レのために殺した動物，ごく稀には植物（穀物など）」で，次の「②身命を捧げて他のために尽くすこと。ある目的を達成するために，それに伴う損失を顧みないこと。“一を払って敵陣を奪取する”“自らは一となって人命を救う”③自分の意志によらず戦争・天災・事故のまきぞえなどで生命を失ったり傷ついたりすること。“戦争の一者”“交通禍の一となる”」は，志願の献身と不意の受難とを分けている。『現代漢語詞典』の「①_㊦古代為祭祀而宰殺的牲畜。②_㊦為了正義的目的舍棄自己的生命：流血～|為國～|他～在戰場上。③_㊦放棄或損害某種利益：～休息時間趕修機器。」（①_㊦古代に祭祀の為に屠殺される家畜。②_㊦正義の目的の為に自分の生命を捨てる。「命を犠牲にする」「国の為に犠牲に為る」「彼は戦場で犠牲と為った」③_㊦ある種の利益を放棄し或いは損なう。「休憩時間を犠牲にして急いで機械を修理する」）は，日本語と違って自発的でない行為や災難に巻き込まれた被害を除外し，身命を捧げる犠牲は文字通り死に結び付くとする。「犠牲品」は犠牲を払う意志の無い「被犠牲」（犠牲を強いられる）の者・物と言えるが，戦乱や災禍に由る喪失・毀損に用いる和製語義は巡り巡って中国の実情に合う。

『日本国語大辞典』の【犠牲】の3点目の用例「其面影（1906）〈二葉亭四迷〉五七“僕は家も名誉も何も角（か）も犠牲にして掛ってるんだ」に因んで言えば，中共主導の土地改革で消滅を余儀無くされた地主階級の「被犠牲」は家や名誉だけでなく，家主_ひ延いては家族の資産の没収乃至生命の剥奪に及ぶ事が多く伝えられている。毛沢東は32年ぶりの帰郷の述懐と為る七律『到韶山』（韶山に到る，1959.6.25）の首聯～頸聯で，「別夢依稀咒逝川，故園三十二年前。紅旗卷起農奴戟，黒手高懸覇主鞭。為有犠牲多壮志，敢教日月換新天。」（別れしひの_{まほろし}夢おほろ逝きし川を呪う，故の園よ三十二年前。紅旗農奴の戟を捲きて起てば，黒手覇主の鞭を高く_{ふりかざ}懸したりき。為に犠牲となれる壮志は多かりしが，敢して日月を新しき天に換えしめぬ）と詠んだ。周恩来がニクソンに紹介した⁴⁹⁾この詩の中の「覇主鞭」は蒋介石の「白色恐怖」を指す⁵⁰⁾が，「農奴」（抑圧された農民）は新時代を切り開く時に戟で「紅色恐怖」を引き起した。毛は1927年3月に『戦士』週刊（中共湖南区委機関誌）に『湖南農民運動考察報告』（「考察」

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (3) (夏)

= 視察) を発表し、農民・^{ルンペン (ごろつき)・プロレタリアート}「流氓 (成らず者) 無産者」の地主打倒・土地奪取の過激な運動を擁護して、「革命不是請客吃飯，不是做文章，不是繪畫繡花，不能那樣雅致，那樣從容不迫，文質彬彬，那樣溫良恭儉讓。革命是暴動，是一個階級推翻一個階級的暴烈的行動。」(革命は客を招いて宴会を開くことでもなく，文章を作ることでもなく，絵を描いたり刺繡^{しゅう}をしたりすることでもない。そんな風に雅致が有り，そんな風に^{しゅう}從容として迫らず，上品で礼儀正しく，そんな風に温・良・^{きょう}恭・儉・讓ではあり得ない。革命は暴動であり，1つの階級が1つの階級を覆す激烈な行動である) と言いつつ。その暴力革命の鼓吹は20年後の中共統治区^{しゅう}の行き過ぎた土地改革でも実践され，更に19年後の「文革」で「革命無罪，造反有理」の名の下に暴走を煽て狂瀾を捲き起した。

「雅致」は『現代漢語詞典』で「**囀** (服飾、器物、房屋等) 美観而不落俗套。」(囀 [服飾・器物・家屋等が] ^{マンネリズム}美しくて常套に陥らない) と解釈されるが、『広辞苑』の項は「風流な趣。みやびやかな風情」と為り、『日本国語大辞典』の語釈は更に「上品な様子。雅趣」と有り、「日本風俗備考 (1833) 二二」等5点の用例と「魏書-劉芳伝」の漢籍典拠が付く。『漢語大詞典』の①「高雅的意趣」(高雅な趣) は「《文選-袁宏〈三国名臣序贊〉》」等4点の出典が付き，②「美観而不落俗套」の用例は建国前年の「茅盾《鍛錬》二四」と為る。この長篇小説(香港『文滙報』1948.9.9~12.9 連載)の作者(原名沈徳鴻，1896~1981)は，中共の創設成員・初代文化部長(49~65)の作家・社会活動家で，**共産党治下の中国語から古義をどんどん駆逐する新義の創出者に相応しい**。『現代漢語詞典』の【文質彬彬】は有るまじき重複表現を用いて，「原形容人既文雅又朴实，^{ママ}後來形容人文雅有礼貌。」(元は人が温和で礼儀正しいし素朴である様の形容，後にこれを以て人の温和で礼儀正しいし^{ママ}礼儀正しい様を形容する)と説明している。【文雅】は「**囀** (言談、挙止) 温和有礼貌，不粗俗」(囀 [話し方・振る舞いが] 温和で礼儀正しい，粗野・卑俗でない) だから，語義に含む「有礼貌」を後に付ける**自家重疊**(「自家撞着」を振った造語)は可笑しい。用例の「談吐~ | 挙止~」(「話し方が温和で礼儀正しい」「振る舞いが温和で礼儀正しい」)は，**儒教の「道」(理念)を具体的な作法・様態に矮小化している**。

『広辞苑』の【文雅】は「①文事の，風雅な道。②みやびやかなこと。優美。風流」の両義で，用例として其々「一に秀でる」「一の士」が付されている。『日本国語大辞典』の語釈は「【名】詩文を作り歌を詠むなどの，文学上の風流な道。また，文学に巧みで風流なこと」で，「懐風藻 (751) 秋宴〈紀古麻呂〉」等4点の用例と「呉志-^{せつせい}薛瑩伝」の漢籍典拠が有る。『漢語大詞典』では①「温文而雅，講礼儀而不粗鄙」(物腰は温和で，^{たちいふるまい}立居振舞は上品で，礼儀を重んじ，粗野・卑俗でない)，②「猶文教」(文教に同じ)，③「文才; 文士」の多義と為り，其々「《大戴礼記・保傅》」等5点，「漢買誼《新語・道基》」等4点，「《周書・元偉伝》」等3点の出典が付くが，毛沢東が非革命的とした詩文作り等の風流韻事の意味はその時代の中国語に於いて，創作の自由や「^{プチ・ブルジョア}小資産階級の趣味」に対する抑制と連動する様に消えた。『広辞苑』の【文質】(=「外

見の美と実質。かざりとなかみ)の熟語項【文質彬彬】は、「[論語雍也] 外見の美と実質とがよく調和しているさま。君子たる条件をいう」である。『現代漢語詞典』で立項されない「文質」は『日本国語大辞典』の【名】①で、「([論語-雍也]の“質勝_レ文則野, 文勝_レ質則史。文質彬彬, 然後君子”による) 文華と質朴。文明的なものと素朴なもの。また, 飾りとなかみ。外見にあらわれた美しさと内容の質」と詳説され、「古事記(712)序」等3点の用例と「白虎通-姓名」の漢籍典拠が示されるが、『漢語大詞典』で対応するのは①「文華与(=と)質朴」(出典=「晋杜預《春秋経伝集解》」等5点)しか無い。『日本国語大辞典』の【文質彬彬】の語釈は「〔形動タリ〕([論語-雍也]から) 文明的なものと素朴なものとうまく調和して備わっているさま。また, 外見の美と実質とがよく調和しているさま」で、「連歌比況集(1509頃)等2点の用例の後に「論語-雍也“文質彬彬, 然後君子”」が引かれる。『漢語大詞典』では「亦作“文質斌斌”。①文華質朴配合得宜, 既有文彩, 又很朴实。②形容人举止文雅有礼貌」(亦「文質斌斌」に作る。①文華と質朴とがよく調和し, 詩文の華麗さが有り, 素朴でもある。②人の挙措が上品で礼儀正しい様の形容)の両義と為り, 其々「[論語・雍也]」等6点と「元費唐臣《貶黃州》第三折」等3点の出処が有る。「文質」の「文」が意味する「文華」は『広辞苑』で、「①詩文の美しくはなやかなこと。また, その詩文。②文明のはなやかなこと。文明の立派さ」と説明されている。『日本国語大辞典』で同じく【文雅】の前に在る【文華・文花】【名】は、「①文章の美しく, はなやかなこと。詩文の華麗なこと。また, その作品」に、「懐風藻(751)初秋於長宅宴新羅客〈調古麻呂〉」等3点の文例と「梁昭明太子-文選序」の漢籍典拠が有り、「②(形動)文明のはなやかなで立派なこと。また, そのさま」に、「清原国賢書写本莊子抄(1530)五」等3点の用例と「後漢書-班彪伝論」の漢籍典拠が付く。①の初出は「文雅」と同じ文献・作者で題も毛が貶した「宴」を含めるが, 両義とも漢籍に由来したこの単語は『現代漢語詞典』から外されており, 逆に日本の両辞書は孔孟の教えと中国の古典を忠実に踏まえている。

『漢語大詞典』の【文質彬彬】②の用例の2点目は「毛沢東《湖南農民運動考察報告》」だから, この四字熟語は現代の中国で古義を失って久しいと見て可い。毛が否定した「文質彬彬」の原典は「子曰く, “質, 文に勝てば則ち野。文, 質に勝てば則ち史。文質彬彬として, 然る後に君子なり”」で、「温良恭儉讓」は同じ『論語』の「子貢曰く, “夫子は温良恭儉讓, 以て之を得たり”」が語源である。この五字は『広辞苑』で【温良】(=「[礼記楽記]」おだやかで, すなおなこと。“一篤実”)の熟語項として有り、「[論語学而]」おだやかで, すなおで, うやうやしく, つつましく, ひかえめなこと。孔子が人に接するありさまを評したことば」と為る。『日本国語大辞典』の【温良】(「[名] [形動] 人柄が穏やかで, 素直なこと」+「三国伝記 [1407-46頃か] 一・三〇」等5点の用例+「論語-学而“夫子温良恭儉讓以得_レ之”」)の内の【おんりょう 恭(きょう) 儉(けん) 讓(じょう)】は, 語釈「([論語-学而]」で, 子貢が孔子の

人に接する態度を評していった言葉から) おだやかで、素直で、うやうやしく、つつましかで、ひかえめな態度。聖賢の人に接するさまをいう」と、用例「江戸繁昌記(1832-36)四・学校“夫子は温良恭儉讓。聖猶を然り”」とから為る。『現代漢語詞典』では【温良】(=「**㒼**温和善良: 她举止娴雅, 性情~。」「温和・善良。「彼女は挙措が閑雅で、気性が温良だ」)が有るが、毛の呪縛の所為か日本の国語辞書に保存された2つの『論語』由来の熟語は選外と為った。用例中の「**㒼**文雅(多形容女子): 談吐~。也作閑雅。」(㒼温和で礼儀正しい[多く女性を形容する]。「話しぶりが温和で礼儀正しい」。「閑雅」にも作る)は、『広辞苑』の【閑雅】の「①しとやかでみやびやかなこと。“一な挙措”②閑静で雅致のあること。“一なたたずまい”」と異なる。『日本国語大辞典』の【閑雅・間雅】『名』の「①態度がしとやかでみやびやかなこと。優にやさしいこと。また、そのさま」は、「呂氏春秋-士容」の漢籍典拠に由来し「懷風藻(751)石上乙麻呂伝」等4点の用例が有り、「②もの静かで、景色などにおもむきのあること。また、その様子」は、「春雨文庫(1876-82)〈松村春輔〉一八」等3点の用例のみである。和製語義の②は閑静で優美な景色が沢山有る日本の風土の所産と思われるが、「温良」に対する毛の否定は環境保護以前の品格保持への無関心をも意味する。

『現代漢語詞典』にも「**㒼**雅」と同義・異字の【閑雅】の項が有るが、「**㒼**雅」の表記を規範とし主に女性の場合に用いる現代中国語の決り事から、温和・礼儀正しい言動は女性的な淑やかさ・物静かさの所産が多いという発想が垣間見える。中共政権の男女平等の理念に由り女性参政の比率が日本より遥かに高く、国会議員に占める比率は2018年に24.2%対13.7%(世界で70位対140位)の大差と為る⁵¹⁾が、党の最高指導部の女性皆無の伝統は成立101周年の「20大」に至っても変わりそうに無い。中国の政治・権力の頂点に於ける男性独占の背景や必然性を探る際に、日本語の同音の連環で繋がる「幽閑」「悠閑」「憂患」「勇敢」「勇悍」が手掛りに為る。『広辞苑』の【幽閑・幽間】は「もの静かなこと。平家四“一寂寞の御すまひ”」で、『日本国語大辞典』の「『名』(形動)奥深くて静かなこと。静かで落ち着いていること。暗くて静かなこと。また、そのさま」はより深みが有り、「文華秀麗集(818)上・春日嵯峨山院〈嵯峨天皇〉」等4点の用例と共に「顔延之-秋胡行」の漢籍典拠が付く。『広辞苑』に無い【遊閑・悠閑】は「『名』(形動)静かで暇なこと。用事もなく暇で遊んでいること。また、そのさま」の意で、用例2点の初出「読本-英草紙(1749)一・一」は「馬融-長笛賦」の漢籍典拠と同じ「遊」と記し、2世紀後の「自由学校(1950)〈獅子文六〉ふるさとの唄」で「悠」と為った。『漢語大詞典』の【悠閑】の語釈は「亦作“悠閑”。謂從容閑適而無所牽掛(亦「悠閑」に作る。從容・閑適で係留が無いことを謂う)で、用例4点の初出「明呂天成《齊東絶倒》第四出」は和文の「悠閑」の出現より3世紀も早い。『現代漢語詞典』の【悠閑】は「㒼閑適自在: 神態~ | 他退休後過着~的生活。也作幽閑。」(㒼閑適・自在。「ゆったりとした物腰」「彼は定年後、悠々自適の生活を送っている」。「幽閑」にも作る)であるが、鄧小平の軍委主席任

期無制限と引退後の「南巡」の様に悠閑に甘んじない要人が多い。第16期政治局の唯一女性委員呉儀（1938～）は國務院常務副総理を退任した（2008.3）後、名誉職も含めて如何なる役職にも就かず表舞台から遠ざかって余生を楽しんで来た。辣腕を揮った「鉄娘子」（鉄の女）だけにその潔さは国民から尊敬の眼差しで見られたが、元中央指導部成員の引退後の政務関与に見る「男濃女淡」（造語）の差の好例でもある。

『現代漢語詞典』第7版で【裸退】（裸の儘に身を引く。完全引退）の項目が新設されたが、その「働退休後不再担任任何職務。」（働定年退職後、如何なる職務をも担当しない）は、第6版刊行の5ヵ月後に胡錦濤が総書記・軍委主席の「全退」で典範を示した。兩大権の禪譲を受けた習近平は第18期1中全会後に「18大」の全代表との会見で、前任者の進んだ完全引退を「高風亮節」（高風清節）の賛辞で感謝した。この熟語は『現代漢語詞典』で「高尚の品格、堅貞の節操」（高尚な品格、確固たる節操）と説明され、用例「～、举世同仰」（高風清節、天下の敬慕を受ける）は最大級の賛辞である。権力に恋々と縋り着く執着が無く鄧小平・江沢民の変則的な軍委主席留任を踏襲せず、任期に法定の終了が有る原則を遵守した文字通り「有終の美」は、政争が絶えず世代交代に支障が多い党の健全化の新たな出発点と為った。その挙動と関連する「勇退」は『日本国語大辞典』で、「〔名〕思いきりよく退くこと。潔く官を去ること。後進に道をひらくために定年などの期限前に自分から進んで官職などをやめること」の意と為り、「三体詩幻雲抄（1527）」等3点の用例と「梁武帝－中飭選人表」の漢籍典拠が有る。『広辞苑』の語釈「後進に道を開くため、自ら進んで官職などから身を引くこと」に、用例の「定年を待たず一する」が付されている。熟語項【勇退高踏】（＝「官職から勇退し、俗世間を避けて生活すること」）は、出処が未詳ながら『日本国語大辞典』でも立項されている（＝「官職から勇退し、俗事を離れて悠々とした生活を送ること。また、そのような生活態度」）。中国では「15大」で江沢民の定年（当時70歳）超の特例続投が認められた様に、後進に道を譲らず規定を無視して粘り延いては定年の規定を無くす向きが目に見えるから、『現代国語詞典』に古来の「勇退」が入らないのも当然の事である。

『現代漢語詞典』に単独の項が無い「高風」は、『広辞苑』では「①すぐれた人柄。②けだかい風采。③他人の人柄や風采の尊敬語」であるが、『日本国語大辞典』では共に「〔名〕①けだかいようす。すぐれた風格。また、相手の人格を敬っていう語」に収斂され、「懐風藻（751）秋日於長王宅宴新羅客〈山田三方〉」等5点の用例と、「夏侯湛－東方朔画賛序」の漢籍典拠が挙げられる。死語化した「②空高く吹く風」は漢籍の「曹植－仙人篇」に由来し、「実隆公記－文明七年（1475）八月六日」の用例が付く。『現代漢語詞典』に収録されない「亮節」は『漢語大詞典』の項で、「①高亢之声。②高尚の節操」（①高らかに可く響く声。②高尚な節操）の両義と為り、其々「晋陸機《猛虎行》」等2点、「唐白居易《与仕明詔》」等2点の出典が示される。日本語には影響の大きい白の用例が有るにも関わらずこの単語は無いが、近義の「清節」

の『広辞苑』の項は「きよいみさお。汚れのない節操。清操」で、『日本国語大辞典』（語釈＝「清らかなみさお。汚れのない節操」）に拠ると、「漢書－王吉伝賛」の漢籍典拠が語源で、用例に「兩足院本山谷抄（1500頃）一六」等4点が有る。「高風清節」も無い日本の四字熟語から「高風亮節」と似た褒め詞を探すなら、『日本国語大辞典』の【高風】の真下に有る【光風霽月】が思い付く。「〔名〕さわやかな風と晴れわたった月。中国、宋の黄庭堅が周敦頤の人柄を評した語で、性質が高明でわだかまりがなくさっぱりした様子形容に用いる」の意で、「宋史－周敦頤伝」に由来し「空華集（1359－68）九・次韻送陵上人」等4点の用例が付く。前の【孔夫子】（＝「孔子を敬っている語」＋「洒落本・仕懸文庫（1791）跋」の用例＋「蔡文淵－贈中議大夫襲封衍聖公孔治神道碑記」の漢籍典拠）は、前出の「江戸繁昌記（1832－36）四・学校“夫子は温良恭儉讓。聖猶を然り”」と繋がる。『広辞苑』の「〔宋史道学伝一、周敦頤〕（黄庭堅が周敦頤の人品を評した語）心が高明で執着なく、快活・洒落なこと」も人物の好評であるが、『現代漢語詞典』の「雨過天晴時風清月明的景象，比喻開闊の胸襟和坦白的心地，也比喻太平清明的政治局面。也說霽月光風。」（雨が止んで空が晴れた時の、風が爽やかで月が澄む光景。広い度量と素直な気性を喩え、太平・清明の政治的局面をも譬える。「霽月光風」とも言う）は、日本語で同音の「快活」に対する「開闊」（＝『広辞苑』の【開豁】②「度量の広いこと。“一な性格”」）も目を引くが、社会情勢の形容にも用い得る点は中国語の政治性の現れだけでなく、胡錦濤「全退」時の様な減多に訪れない清くて明朗な晴れ間に対する感激の所産でもある。

胡錦濤は鄧小平時代以来の「長老干政」（執政に対する長老の干渉）に否定的であるが、3権「全退」の4年弱後の2017年1月26日（旧暦の大晦日の前日）に突如、広東省委書記胡春華（1963～）の御伴で省都広州の花市場に姿を現した。買物客等が撮った写真の電腦網上の拡散で後進を応援する当人の訴求は発信されたが、「小胡」（若輩の胡）の10月の新政治局常委への昇格が果せなかったものの、「大胡」（年輩の胡）の「力挺」（極力支持・擁護する）は後見人の責任感を自派に示した。25年前の同じ広東まで行った鄧小平の「南巡」も新指導部の停滞・逆行への不満に由り、勇退した元最高指導者も後任に盲進の兆しが出ると安居・幽閑を享受してられない。『現代漢語詞典』の【高風亮節】の次の【高峰】に、「③借指領導人員中的最高層：～會議。」（③転じて指導者の中の最上層を指す。「首腦〔部〕會議」と有る。権力構造の頂上を發生源とする「高風」（空高く吹く風）は方向を誤る恐れも否めないが、古賢が言う「樹欲静而風不止」（樹静かならんと欲すれども風止まず）の通りである。この成句は「樹要静止而風却不停地刮（語出《韓詩外伝》九）。比喻事物的客観存在和發展不以人的意志為轉移。」（樹は静止しようとするのに、風は吹き止まない〔『韓詩外伝』『九』の語に由る〕。物事の客観的存在と發展が人の意志に由って変らないことの比喻）と説明されているが、『広辞苑』の項は「〔韓詩外伝九〕孝行をしようと思っても、その時まで親は生きていてくれない。親の在世

中に孝行せよという戒め。“子養わんと欲すれども親待たず”の対句。風樹ふうじゆの嘆」である。

『日本国語大辞典』の【木・樹】の内の【き 静（しず）かならんと欲（ほつ）すれども風（かぜ）止（や）まず】は、語釈の「（木が静かになろうと思っても、風がやまないのさうにもならないの意から）やっと親孝行をしようと思う時には親は死んでいる。親のいる間に孝行せよの意。また、思うようにならないことのたとえ。風樹の嘆（たん）」に、用例・漢籍典拠の「* 往生用集（984-985）大文六 “樹欲_レ静而風不_レ停，子欲_レ養而親不_レ待” * 韓詩外伝-九 “樹欲_レ静而風不_レ止，子欲_レ養而親不_レ待矣”」が挙げられる。前漢の学者、「韓詩学」の創立者韓嬰（生歿年不詳）著『韓詩外伝』（10巻）は、『詩経』の章句に関連する故事・逸聞・伝承等を記述した書物で、件の対句は儒教の「百善孝為先」（百善のうち孝を先と為す。孝は百行の本）の観念を体現しているが、日本で漢籍の原義が継承され中国で不穩の動きの必然性が強調される様になったのは、両国の生存環境の安・乱の多寡や「憂患意識」の質・量の差を思わせる。『日本国語大辞典』の【憂患】は「〔名〕心配し、心を痛めること。心痛」の意で、「濟北集（1346頃か）一五・李斯論」等4点の用例と「礼記-大学」の漢籍典拠が有るが、『広辞苑』の「心配し心を痛めること。心痛。うれい」に対して、『現代漢語詞典』の語釈「だいいち 困苦患難」と用例「飽経〜」（困苦・患難を嘗め尽す）は、安居を妨げ犠牲を強いる乱世が度々現れ長く続く多難な国情を映し出す。

注

- 42) 李志綏『毛沢東私人医生回憶録』（[台北]時報出版，1994）第1篇第6節に詳述が有り、彭德懐は53年の政治局会議でも同様の提起をしたとされる。同年の英語版 *The Private Life of Chairman Mao: The Memoirs of Mao's Personal Physician* に拠る日本語版（新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』、文藝春秋、2巻、同年）では、上巻の「第二部 一九四九-一五七年」第7節「主席はダンスがお好き」に見える。
- 43) 目加田誠『杜甫』（集英社『漢詩選9』、1996）に基づく和訳であるが、個別の表記を変えている。
- 44) 松浦友久・植木久行編訳『杜牧詩選』（岩波文庫、2004）の植木訳に拠り、個別の表記の変更が有る。
- 45) 楊銀禄『庭院深深釣魚台——我給江青当秘書』（中国当代出版社、2014）に詳述が有る。『我給江青当秘書』（中共党史研究室機関誌『百年潮』月刊、1998~2000連載）の日本語版（莫邦富・鈴木博・廣江祥子訳『毛沢東夫人江青の真実』、海竜社、01）では、第2章「なぜ江青は“特殊な人物”になったのか」第1節「私は自分のやりたいことをする」に見える。
- 46) 注45文献、日本語版第2章第3節「若さと活力を維持するために若い兵士の血を輸血」に詳述が有る。
- 47) 佐野眞一「ドキュメント 昭和が終わった日2 元号“平成”の決定の瞬間」（『文藝春秋』2009年3月号）に拠る。
- 48) 本稿中の孟子語録の和訳は、内野熊一郎著『孟子』（明治書院『新釈漢文大系』第4巻、1962）に基づくが、個別の表記を変えている。
- 49) 『ニクソン回顧録』第1部『栄光の日々』（1978、日本語版=松尾文夫・斎田一路訳、小学館、同年）第7章「世界を変えた1週間」に言及が有る。

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (3) (夏)

- 50) 毛沢東『対《毛主席詩詞》中若干詞句的解釈』(1964年1月27日), 『毛沢東詩詞集』(中共中央文献研究室編, 中央文献出版社, 1996) 257頁。
- 51) 「世界の女性議員割合 国別ランキング・推移」, Global Note (国際統計・国別統計専門サイト), 2018年3月2日。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

毛泽东的“魔幻缚”与习近平的“超限战” ——古今“盛衰兴亡周期律”及中国之去向（3）

本部分首先由白居易《长恨歌》、杜牧《过华清宫绝句 其一》诗，回顾古代皇、妃之骄奢淫逸，联系彭德怀针砭毛泽东“后宫佳丽，粉黛三千”，林彪之子“选妃”遭人诟病，及高层领导享受特供制度至今未废，指出毛开创的“封建社会主义”以来故态依然的贵权特殊意识有待消除。

接着以杜甫名句“挽弓当挽强，用箭当用长。射人先射马，擒贼先擒王”为例，确认中国文学因战乱频繁的历史而加深的奋争精神。对比习近平时代官方常言的“开弓没有回头箭”，在把改革比作战争的豪言中发现“先军”传统和英雄主义。

继而以孟子言“有恒产者有恒心”，对比经土地革命战争而建政的中共治下土地公有制使个人难置地产的矛盾，及在“革命就是暴动”、“造反有理”口号下“红色恐怖”导致大量牺牲的惨剧，注视对孔孟之道的清除造成道德水准下降、高风亮节难得。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）